

辻井廃寺

第32次発掘調査報告書

2016

姫路市教育委員会

序

姫路城の北西約2.2kmに位置する辻井廃寺・辻井遺跡は戦前からその存在がすでに知られおり、また昭和15年に縄文人骨が出土したことで有名です。現在でも水田の中に廃寺の塔心礎が残っており、開発が進むなかであって、往時の姿を偲ばせています。

本書は、辻井廃寺・辻井遺跡で平成27年6月から11月にかけて実施した発掘調査成果をまとめたものです。今回の調査では、残念ながら廃寺に直接関係する遺構は多くは確認できませんでした。しかし、それをさかのぼること約1000年前の弥生時代の竪穴住居や土坑、水路跡といった集落に関連する遺構を調査することができました。これらは、地域の歴史をより豊かなものにするとともに、学問的にも大変意義のあるものであると考えています。

最後になりましたが、今回の発掘調査事業の実施にあたり多大なご協力を賜りました株式会社赤鹿地所、その他関係各位に心から御礼申し上げます。

平成28年3月
姫路市教育委員会
教育長 中杉隆夫

例言

1. 本書は、姫路市辻井に所在する辻井廃寺（県遺跡番号020163）第32次調査の発掘調査報告書である。なお、辻井廃寺は縄文・弥生および奈良時代の集落遺跡である辻遺跡（県遺跡番号0120162）と重複している。
2. 発掘調査は、姫路市辻井一丁目775、776-4、782、783、782-1、783-1における宅地造成工事に伴い、株式会社赤鹿地所と委託契約を締結し、姫路市教育委員会が実施した。現地での発掘調査は、姫路市埋蔵文化財センター福井 優が担当した。
3. 発掘調査は、平成27年6月17日から同年9月12日および同年11月19・20日にかけて実施した。調査面積は、608㎡である。
4. 本書の編集・執筆は福井が行った。また、遺構の残留磁気測定による年代測定については、兵庫県立大学防災教育センター 森永速男先生に依頼した。
5. 遺構および遺物写真は福井が撮影した。
6. 本報告にかかわる調査の記録、出土遺物などは、すべて姫路市埋蔵文化財センターで保管している。
7. 発掘調査・報告書作成に際して、下記の方々にご援助を頂きました。記して感謝申し上げます（敬称略）。
株式会社赤鹿地所、森永 速男
黒岩 紀子、香山 玲子、清水 聖子、田中 章子、玉越 綾子、寺本 祐子、野村 知子、藤村 由紀、三輪 悠代

凡例

1. 発掘調査で行った測量は、世界測地系（測地成果2000）に準拠する平面図直角座標系第V系を基準とし、数値はm単位で表示している。
2. 本書で用いる標高は、東京湾平均海面（T.P.）を基準とし、使用する方位は世界測地系の座標北である。
3. 本書で使用した地形図は、国土地理院発行の2万5千分の1地形図（姫路南部）・（姫路北部）・（龍野）および姫路市基本地形図を使用した。
4. 遺構の略称は、以下のように呼称している。
SH:竪穴建物、SB:掘立柱建物、SK:土坑、SP:柱穴・小穴、SD:溝、SA:柱列
5. 遺構・土層等の呼称は、調査時の遺構番号を基本とするが、整理に際して変更したものもある。
6. 土色と土器の色調は、小山正忠・竹原秀雄編2003『新版 標準土色帳 25版』日本色研事業株式会社に準拠した。
7. 土器の図化に関しては、小片の場合でも復元的に図化したものを掲載している。その際、文様などについては、残存部位のみの図化にとどめている。ただし、直線文などのように、文様の全容がある程度予想できるものについては、復元して図化しているものもある。また、拓本を用いた破片の実測図は、右から外面の拓本、断面図の順に配列している。
8. 遺物番号は基本的に通し番号とする。
9. 本書に用いた遺物番号は、本文・挿図・写真図版ともに一致する。

本文目次

序
例言
凡例

第1章 調査の経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 当該地周辺における既往の主な調査	1
第3節 本発掘調査（第32次調査）	1
第2章 調査の成果	2
第1節 調査概要	2
第2節 弥生時代の遺構・遺物	2
第3節 奈良時代の遺構・遺物	5
第3章 まとめ	6

挿図目次

挿図1 SK25出土土器
挿図2 包含層出土瓦

図版目次

図版1 1 周辺の主な遺跡
2 調査地の位置
図版2 既往の調査
図版3 調査区全体図
図版4 調査区基本土層図
図版5 1 SH1平・断面図、SK1断面図
2 SH2平・断面図、SK1・周壁溝断面図
3 SH3平・断面図、周壁溝断面図
図版6 1 SH4平・断面図、床面構築以前の炭層の
広がり
2 SH5平・断面図、下部構造
図版7 1 SH6平・断面図、イチマル土坑・柱穴断
面図
2 SK30平・断面図
図版8 SK30出土土器（1）
図版9 1 SK30出土土器（2）
2 SP8平・断面図、出土土器
図版10 1 SD5・9平面図・断面図
2 SD5出土土器
3 SD9出土土器（1）
図版11 SD9出土土器（2）
図版12 1 SD9出土土器（3）
2 SK36平・断面図、出土瓦
3 SK43平・断面図、出土瓦

図版13 1 SK53平・断面図、出土瓦
2 SD13・14・16平・断面図、SD13瓦溜ま
り平面図、SD13出土瓦
図版14 1 SB1・2、SA1、SD28平面図
2 SB1平・断面図
図版15 1 SB2平・断面図
2 SA1・SD28平・断面図

写真図版目次

写真図版1 1 塔心礎から八丈岩山（山崎山古墳群）
を望む
写真図版2 1 調査区全景（北西から）
2 調査区全景（北から）
3 調査区全景（北東から）
写真図版3 1 SH4（南西から）
2 SH6（北から）
3 SH6イチマル土坑（北から）
4 SK30（北東から）
5 SK30土層断面
6 SP8土器棺出土状況（南西から）
写真図版4 1 SD9土層断面
2 SD9土器出土状況（南から）
3 SB1（北東から）
4 SP43土層断面
5 SB2（北から）
6 SA1・SD28（西から）
7 SD13瓦溜まり検出状況（西から）
写真図版5 13・13詳細・28・29（蓋）・30（棺身）・38
写真図版6 31・50・52・55・56外面
写真図版7 56内面・59・60瓦当の接合面・60・61・
挿図1

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

調査の経緯 平成27年（2015年）に姫路市辻井一丁目775外において、宅地の造成計画（対象面積約3800㎡）が持ち上がった。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地である辻井廃寺及び辻井遺跡に該当していることから、姫路市教育委員会生涯学習部文化財課において遺跡の取り扱いについての協議が行われた。当該地周辺では、第1次主要伽藍確認調査（3次）、辻井廃寺南限確認調査（13次）、辻井廃寺西限確認調査（18次）、辻井廃寺中門・回廊確認調査（20次）や民間開発に伴う発掘調査（2・11・24次）等が行われている（図版2）。今回はそれらの成果を略述することで、確認調査に代える。

第2節 当該地周辺における主な既往の調査

戦前の調査 辻井廃寺・辻井遺跡の調査歴は古く、昭和15年（1940年）の試掘調査によって出土した縄文人骨はあまりに有名である。その後も、戦中の困難な状況下でありつつも踏査は続けられた。それら踏査の記録は、『姫路市辻井遺跡-その調査記録-』（今里1971）に詳しい。

第3次調査 主要伽藍を確認する目的で実施した。現存する心礎周辺では、基壇はすでに削平を受けていたものの、心礎北側の調査区では礎石立ちの建物が存在する可能性が高くなった。特筆すべき出土遺物としては奈良三彩の火舎が挙げられる。

第13次調査 寺域の南限を確認する目的で実施した。掘方の一辺が1mを超す2基の掘立柱建物を確認した。その建物方位から既に確認されている辻井廃寺の遺構の方向と一致するもの（建物1）と、創建以前の遺構の方位と一致するもの（建物2）に分けられる。このうち、廃寺と同時期の建物については、心礎との位置関係から南門である可能性が指摘されている。

第18次調査 寺域の西限を確認する目的で実施したものの、築地塀や柵など寺域を区画するような遺構は確認できなかった。検出した遺構は、縄文時代晩期の土器棺や弥生時代の竪穴建物、土坑やピットのほかに7世紀前半頃のピットや溝である。

第24次調査 寺域の北限を確認する目的で実施した。奈良時代の遺構は掘立柱建物2棟と柵、溝4条である。このうち建物は、廃寺およびその先行遺構の方位とも一致しないために位置付けは難しい。ただ柵については先行遺構と方位を一にしている。特筆すべき出土遺物として、蓮華文鴟尾や当廃寺初の文字瓦「寺」が挙げられる。このほかには、弥生時代中期前半の土坑や中期後半の竪穴建物を確認した。

第3節 本発掘調査（第32次調査）

第32次調査 本発掘調査に際して、姫路市と株式会社赤鹿地所との間で委託契約を結び、姫路市埋蔵文化財センターが調査を実施した。調査対象は、兵庫県教育委員会からの発掘調査の通知に基づき、土留擁壁や下水道管等の設置・敷設工事により地下の遺構・遺物に影響が及ぶ範囲とした。調査面積は608㎡である（図版1-2）。また、耕作土と床土（土壌化層）および遺物包含層と考えられる土層については主に重機による掘削を行い、遺物の採集にとどめた。それより下位については、人力によって精査した。

現地での発掘調査から室内での整理作業終了までの調査体制は以下のとおりである。

姫路市教育委員会事務局

教 育 長	中杉 隆夫
教 育 次 長	八木 優
生涯学習部長	植原 正則
文化財課長	花幡 和宏
係 長	大谷 輝彦（調整）
技 術 主 任	南 憲和（調整）

姫路市埋蔵文化財センター

館 長	秋枝 芳
係 長	岡崎 政俊（庶務）
主 事	小林 啓祐（庶務）
係 長	森 恒裕（調整）
技 術 主 任	福井 優（調査）

第2章 調査の成果

第1節 調査概要

基本土層 調査地の現況は耕作地で、標高は約18.8mである。図版4は調査区の各地点の柱状図である。層名は、耕作土を1層、旧耕作土を2層とし、これまでも整地土である可能性を指摘されてきた暗褐色土を3層、遺構埋土を4層、地山である黄褐色土層を5層とした。

ここで、地山のレベルについてみると、調査区北側では標高18.8m、南東隅で約18.5m、それ以外の地点では概ね18.7mを測る。これらにより、当該地においては概ね北側から南側に緩やかに傾斜する旧地形を復元しても大過ないと考えられる。

検出遺構 今回検出した主な遺構のうち、その帰属時期を断定できるものは、弥生時代中期の竪穴建物跡4棟、土坑35基、ピット31基、溝11条、後期の竪穴建物2棟である。そして、奈良時代の土坑19基、ピット71基、溝22条である。このほかに埋土の状況などから奈良時代のものである可能性が高い遺構（土坑12基、ピット315基、溝17条）も確認している。

第2節 弥生時代の遺構・遺物

竪穴建物 弥生時代中期（SH1・2・5・6）と後期（SH3・4）の計6棟を検出した。

SH1（図版5-1）

形状・規模 平面形は不明である。検出面からの深さは20～40cm、床面の標高は18.4mである。

屋内施設 3基の柱穴と3箇所のためみ、土坑1基を確認した。SP4は径80cm、深さ11cm、SP5は径35cm、深さ5cm、SP6は径25cm、深さ81cmをそれぞれ測る。床面では径90cm、深さ36cmの土坑を検出した。この土坑はわずかではあるが二段掘り状を呈している。弥生土器の小片が少量出土した。このほかに、床面の一部に被熱によると思われる赤色化や硬化した部分とともに炭化粒の広がりが見られた^註。

出土遺物 床面から遊離した状態で広口壺底部、甕底部、把手、サヌカイト剥片（約30g）が出土した。

時期 広口壺や甕の底部の製作技法から弥生時代中期前半に位置づけられる。

註 被熱によると思われる硬化した箇所について、兵庫県立大学防災教育研究センター森永速男先生に残留磁気測定をしていただいた。古地磁気による年代測定では2000年前頃との結果をいただいた。

SH2（図版5-2）

形状・規模 平面円形を呈し、復元径6m、検出面からの深さは20～35cm、床面の標高は18.7mを測る。上部は後世の削平を受けており、検出時に既に床面がみえていた。

屋内施設 主柱穴と思われる柱穴は2基確認したが、いずれも調査区外に広がっており、深さ等は不明である。本建物北端で土坑1基を確認した。径90cm、深さ28cmを測る。弥生土器の小片が出土している。

出土遺物 小片が多いものの、広口壺の胴部片やサヌカイト製石鏃（平基式：約3g）、同剥片（約5g）が出土している。

時期 概ね弥生時代中期に収まると考えられる。

SH3（図版5-3）

形状・規模 本建物は、第20次調査第2トレンチの竪穴建物（SB01）と一連のものである。両者の図面を合成したところ、平面形は不整な円形で径は4.6mに復元できた。検出面からの深さは40～45cm、床面の標高は18.5mである。

屋内施設 今回の調査では主柱穴はなく、張り出し部と思われる部分を検出した。また、第20次調査当時の所見では本建物は建て替えの可能性を指摘されていたが、今回の調査ではそのような痕跡は確認していない。地山直上には厚さ数cmの貼り床と思われる土層を確認している。

出土遺物 小片が多く辛うじて判別できたのは、タタキ甕の底部で、タタキの仕方に精粗の差がみられる。また、内面にケズリのある破片や器台の胴部も出土している。

時期 弥生時代後期前半に収まると考えられる。

SH4 (図版6-1)

形状・規模 平面隅丸長方形を呈し、長辺3.5m、短辺2.2m、検出面からの深さは20～25cm、床面の標高は18.6mを測る。

屋内施設 本来ならば支柱穴があってもおかしくない場所に、径15～40cmの浅いたわみ4箇所を確認した。いずれも深さは数cmしかないために遺構であるのか否かの判断は困難であった。本建物の周囲には比較的しっかりとした周壁溝が廻っていることから、壁建建物である可能性もある。なお、この床面から地山面までは、厚さ約10～15cmの貼り床が構築されており、建物中央付近の地山上には長軸1.3m、短軸0.8mの範囲で炭の広がりを確認した^註。

出土遺物 粗いタタキが残る甕や高杯の脚部とともにサヌカイト剥片(59g)が出土している。遺物はいずれも床面からは遊離している。

時期 弥生時代中期後半から後期前半に収まると考えられる。

註 この炭の広がり直下の直下において、兵庫県立大学防災教育研究センター森永速男先生に残留磁気測定をしていただいた。古地磁気による年代測定では2300年前頃との結果をいただいた。

SH5 (図版6-2)

形状・規模 平面円形を呈し、復元径7.4m、検出面からの深さは10～15cm、床面の標高は18.6mである。

屋内施設 柱穴は床面である地山上から多数掘り込まれていたものの、どれが支柱穴であるかについては判然としなかった。周壁溝は南側では二重に廻っているが、北側でも建物の外郭ラインから少し内に入ったところに周壁溝を設けているために、建て替えによる重複か、単独の建物の構造の問題なのかについても判然としない。床面上で硬く焼き締まった焼土塊を確認した。また、ごくわずかではあるが、床面上で放射状とも思える向きで炭化材を検出したことから焼失住居の可能性が高い。本建物のほぼ中央付近で、薄い炭層のある浅い土坑を検出した。この土坑は調査区外に続いているために全形は不明であるが、イチマル土坑^註のイチ土坑の可能性を指摘しておきたい。なお、建物の輪郭に沿うように浅い溝状の掘り込みを確認している。建物構築時の下部構造と思われる。

出土遺物 床面から遊離した状態で甕や鉢、高杯などの小片が出土している。これらとともにサヌカイト製の石鏃(凹基式2点:ともに約0.9g)と楔、剥片(約50g)も伴出している。

時期 弥生時代中期後半に廃絶したと考えられる。

註 イチマル土坑とは、弥生時代中期から後期にかけて、現在の兵庫県南西部を中心に分布する竪穴建物の焼土施設の名称である。この遺構については1983年に始まる研究の蓄積があり、本来ならば「1〇型中央土坑」の名称を使用すべきであるが、記述の煩雑さを避けるために本書では「イチマル土坑」と呼称し、「1土坑」を「イチ土坑」、「〇土坑」を「マル土坑」と呼び替える。なお、一連の研究史については山崎敏昭氏の論文(山崎2009)に詳しい。

SH6 (図版7-1)

形状・規模 遺構の平面形については判然としないが、不整形な円形か隅丸方形と思われる。検出面からの深さは30cm、床面の標高は18.3mである。

屋内施設 支柱穴と思われるピットを3基確認した。いずれも径約20cm、深さは約40cmである。周壁溝は断続して廻っているようである。床面のほぼ中央と思われる位置にイチマル土坑が構築されていた。イチ土坑は残存長1.5m、深さ5cm、底面には炭が層状に堆積していた。土器の極小片が出土した。マル土坑は平面楕円形で、短軸60cm、長軸70cm、深さ35cmを測る。土層観察によりイチ土坑から炭化粒や灰を掻き出した様子が看取できる。弥生土器の極小片が出土している。周囲に土手は構築されていない。なお、これらの土坑に接するように炭が薄く堆積する浅い土坑状のたわみが付随している。

出土遺物 床面から遊離した状態で、広口壺口縁部・直口壺口肩部、内面しぼり目のある高杯脚部とともに赤褐色を呈する胎土の小片も出土している。

時期 弥生時代中期後半に廃絶したと考えられる。

土坑 土坑は7基検出した。ここでは、最も豊富な遺物が出土したSK30についてふれておく。

SK30 (図版7-2～9-1)

形状・規模 幅3.6m、延長4.2mを調査した。深さは72cmで船底形を呈する。本土坑は第18次調査の第4トレンチで検出した土坑1と一連のもので、本来の平面形は不整形な長楕円形を呈するものと考えられる。土坑内には、炭層(10層)の上に炭や焼土が混じり土器を大量の包含する土層(9層)が堆積して

いた。さらにその上部には、地山起源と考えられる粘土を小ブロック状に大量に含む土層を確認した。肉眼での観察では、炭層（10層）を除去した面で、被熱による赤色化や硬化がみられなかったうえに、出土した土器には煮沸以外の二次被熱の痕跡が認められなかったことから、炭層（10層）や9層の炭化粒や焼土塊の起源については判然とししない。しかし、土層の堆積状況から、本土坑のこのような状況は、何らかの火を伴う行為の後片付けとして、最終的に埋め戻しをしたという営為の痕跡と考えられる。

出土遺物 本土坑からは、コンテナ（天昇電気工業製テンパコP18、約18^{リットル}）に約10箱の土器が出土し、そのほとんどが9層出土である。調査面積を勘案すると出土量は非常に多いといえる。

広口壺 1～13は壺である。このうち、1～12は広口壺で、頸部の細くて長いもの（1・3）と太くて短いもの（4）がある。頸部や肩部には依然として突帯を施すもの（8・9）があるが、大半は櫛歯状の工具で施文している（5～7・10・11）。11には佐原氏のⅡa類（佐原1964、P140）に当たる櫛描波状文がみられることから、いまだ器壁の施文時に回転運動をさほど利用していないことがうかがえる。12は底部であるが、成形方法については不明である。

台付直口壺 13は台付直口壺もしくは短頸壺ともいえるような器形を呈する。口縁部直下から胴部に至るまで、4条一単位の櫛描直線文と波状文を交互に描いている。ここで注目したいのは、肩部付近に流水文に類似する文様が描かれている点である。文様の全容は不明であるが、一見すると横型流水文（佐原1996他）を指向しているように思われる。しかし、この文様はS字状の屈曲を繰り返すことなく、隅丸長方形帯ともいえる閉じた文様単位によって構成されている。

甕 14～27は甕である。口縁部を短く緩やかに外反するものが多くを占める一方、逆L字状を呈するもの（17・18）が少数見受けられ、まれに口縁部が端部より少し下に下がるもの（19）もみられる。胴部上半の文様については、ヘラ描きのものもごくわずかに認められるが、大半は無文（14～16ほか）が占め、櫛描文（19・20）がそれに次ぐようである^註。24～27は底部である。底面の中央が接地しない個体（24～26）が多い。27についても基本的な製作技法はその他の底部とも大きな違いはないと思われる。

また、土坑底面付近では、土器のほかに、風化が著しい獣骨やその歯牙も出土している。

註 今回の調査では本土坑をすべて調査することはできなかったために、器種や部位ごとに計量化してその傾向を把握することはしておらず、あくまで整理段階での筆者の印象である。

台付鉢 28は台付鉢である。脚台部は既に失われているものの、弱く張る胴部から緩やかに内傾する口縁部が特徴である。口縁端部には刻み目を施す。本資料は先述の13同様、管見の限りでは類例を知らない。

時期 弥生時代中期前半に埋没したと考えられる。播磨における当該期の資料は数が非常に少なく、その意味でも今回紹介した土器群は非常に有意義な資料になり得る。

ピット 弥生時代に明らかに帰属すると判断できるピットは31基あまりを確認した。ここでは土器墓と考えられるSP8の紹介にとどめる。

SP8（図版9-2）

形状・規模 いずれも復元値ではあるが、長軸60cm、短軸45cmの平面楕円形を呈し、検出面からの深さは43cmを測る。断面観察から二段掘り状を呈しているが、埋土は1層であった。また、やや傾斜して置かれた甕（30）の上に、高杯（29）を倒立して被せてあったことから土器棺の可能性が高いといえる。棺内からは遺物は出土しなかった。本ピットの形状から、柱等の抜き取り穴に土器を据えた可能性も否定できない。

出土遺物 棺身と思われる甕（30）は、やや張る胴部や摘み上げる口縁端部を有する。器壁は風化のため粗く縦方向のハケメが微細に残存するのみである。内面の調整は不明である。底部には焼成後の穿孔がみられる。蓋と思われる高杯（29）の脚部は欠損しており、杯部との接合面がみえる。水平に伸びた口縁部や肥厚した端部、後円部内面に廻らされた突帯が特徴である。

時期 弥生時代中期後半に位置づけられる。

溝 溝のうち、調査地を縦断すると思われるSD5・9についてみておく。

SD5・9（図版10・11・12-1）

検出状況 調査区の北西（SD9）やほぼ中央（SD5）で検出した。調査区幅の制限から断定はできないが、

北西から南東方向に走行し、20次調査第2トレンチの溝06へとつながると考えられる。

形状・規模 SD9は幅1.8m、逆台形に近い断面形を呈し、検出面からの深さは52cmである。SD5は幅1.3m、断面形はSD9と同じである。深さは35cmである。ただ、土器を多く包含する土層底面のレベルと比較すると、SD5・9ともに標高18.5mである。埋土の堆積状況からは溝浚えのような営為はうかがえなかった。

出土遺物 土器の出土量はSD5・9を合わせて、コンテナ（約18 $\frac{1}{2}$ ）に約20箱もあり、実際の調査面積を勘案すると、非常に多いといえる。

細頸壺 31は完形の細頸壺である。細い口頸部が直立し、最大径が胴部下半にあるやや下膨れな印象を受ける器形を呈する。胴部中央付近には横方向のミガキを、下半にはそれを切る縦方向のミガキを施している。それまでとは異なり、仕上げの調整が明瞭に分けられているといえる。胴部上半は一次調整である縦方向のハケメのうえに櫛描直線文と波状文を交互に施す。同様の文様構成は頸部にも微細に残存している。このタイプの壺は、姫路市を中心とする中播磨以西ではなく、播磨東半における中期中葉から後葉にかけての様式を構成する器種と位置付けられている（大手前大学史学研究所編2007）。ただ、31の胴部は下半が張るのに対し、播磨東半の細頸壺では胴部中央付近が張るのが一般的である。両者の器形にはわずかではあるが差異が看取できよう。管見の限りでは、前者のような器形を呈する細頸壺は、奈良盆地を中心とする地域に多いように思われる。ただ、文様やその組み合わせについては播磨に通有なものといえるし、胎土についてもさほど違和感はない点も勘案すると、その系譜についてはなお慎重に検討しなければならない。

広口壺 口縁部は強く外反し（32～34）、口縁部内面には突帯を廻らすものが現れ（32・34）、加飾が進行する。口縁端部は肥厚するだけで、まだ垂下するものはみられない。頸部には断面三角形の突帯を廻らすもの（34・35）や指頭圧痕突帯を廻らすもの（33）もある。加飾化の進行は胴部上半にも色濃く現れている（36・37）。これらは播磨型と呼ばれる加飾の多い壺で当該地域の特徴的な器種である。

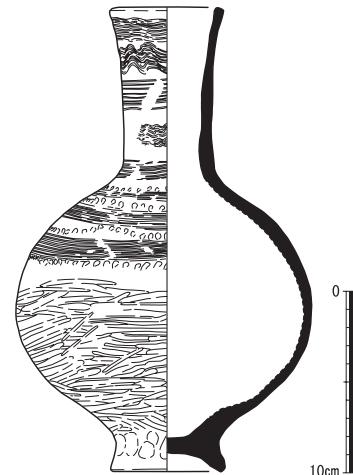
直口壺 38～40は直口壺である。頸部は窄まり、口縁に向かってラッパ状に開く。頸部には指頭圧痕突帯をもつもの（38・39）と施文し断面三角形突帯を廻らすもの（40）がある。大型の38に対し、小型の39も存在する。

その他の壺 41は広口短頸壺である。43・44は底部で、円盤状の底部の側面に粘土紐を積み上げていく、当該期に特徴的な製作技法である。45は無頸壺で蓋を固定するための紐孔が2つ穿たれている。

甕 46～52は甕である。口縁部がくの字状に折れている（46～48・51）。胴部はあまり張らず、その最大径は胴部の上半に位置し、腰高な印象を受ける。内面にはまだケズリはみられない。法量分化が進行していて中型品（46～50）と小型品（51）がある。52の底部には焼成後の穿孔がみえる。

その他 54・55は直口鉢である。56は古相の高杯である。57は台形土器である。

時期 弥生時代中期中葉に埋没したと考えられる。本遺構とほぼ時期と考えられるSK25において出土した細頸壺（挿図1）をみると、その胴部は先述の31とは異なり、中央付近で緩やかに張っていることがわかる。



挿図1 SK25 出土土器 (S=1/4)

第3節 奈良時代の遺構・遺物

遺構 確実に奈良時代の遺構として認定できるものは、土坑19基、ピット71基、溝22条、掘立柱建物2棟、柱列1列である。この他に埋土等の状況から奈良時代に帰属する可能性が高いものを含めると土坑31基、ピット387基、溝39条となる。先にふれた弥生時代の遺構数と比較しても、その差は歴然としている。しかし、出土遺物の観点からすると、その内容は必ずしも豊富ではなかった。そのため、ここでは出土した軒瓦と有機的な関係を認識できたピット等を中心にふれておきたい。

軒丸瓦 軒丸瓦は2種類が出土している。60は複弁八葉蓮華文である。素文縁で、中房部の蓮子は1+4+8である。その蓮子には周環が極めて微細に残っている。蓮子の位置は間弁の線を通る。また、内外区のくぼみに範傷がみえる。同様の資料は辻井廃寺の既往の調査はもちろん、姫路市赤坂窯跡でも出土している。61も複弁の蓮華文であろうが、詳細は不明である。59は二重圏文で中心に珠文を有する。いわゆる「播磨国府系瓦」の本町式（今里1995）にである。この外区の下半は通有の本町式軒丸瓦と比べると歪であるが、成形および調整の痕跡が残っていることから、この面については当初からのものと考えられる。復元径は15cmである。62もおそらくは59と同類であると考えられる。

軒平瓦 軒平瓦は1種類が出土している。58と挿図2は四重弧文である。58は直線顎で、型挽きによって施文している。58と挿図2では、使用している挽き型が異なることがわかる。



挿図2 包含層出土瓦 (S=1/4)

まとめ これまでの研究により辻井廃寺創建時の瓦は61と58・挿図2のセットで7世紀末～8世紀前葉頃に、59・62は播磨国府系瓦の範疇に入るもので、8世紀後半から定額寺化されたことによる（今里2010）とされている。

掘立柱建物等 掘立柱建物は2棟検出した。SB1は1間×2間、SB2は1間×1間以上である。ピットは一辺が50～70cm、深さは30～50cmを測り、柱根を残すものが多い。掘方埋土は地山をブロック状に多く含む層と黒色系の粘土層が互層状に堆積している。柱設置時に突き固めた痕跡であろう。SA1は3基以上のピットが一行に並んでいた。ピットの規模等はSB1・2と類似している。SA1から東に約2mの位置で、SA1ほぼ平行するSD28を検出している。両者の関係について判断できる材料は極めて乏しいものの、方位がほぼ一致していることから掲載することにした。

なお、これらの遺構群の方位についてみると、SB1・2がN-2°-E、SA1・SD28がほぼ座標北を向いていた。これまで検出された寺院に先行する遺構と寺院に関連する遺構とは方位が異なる点、出土遺物から時期が特定できない点から、これらの遺構の性格については判然としない。

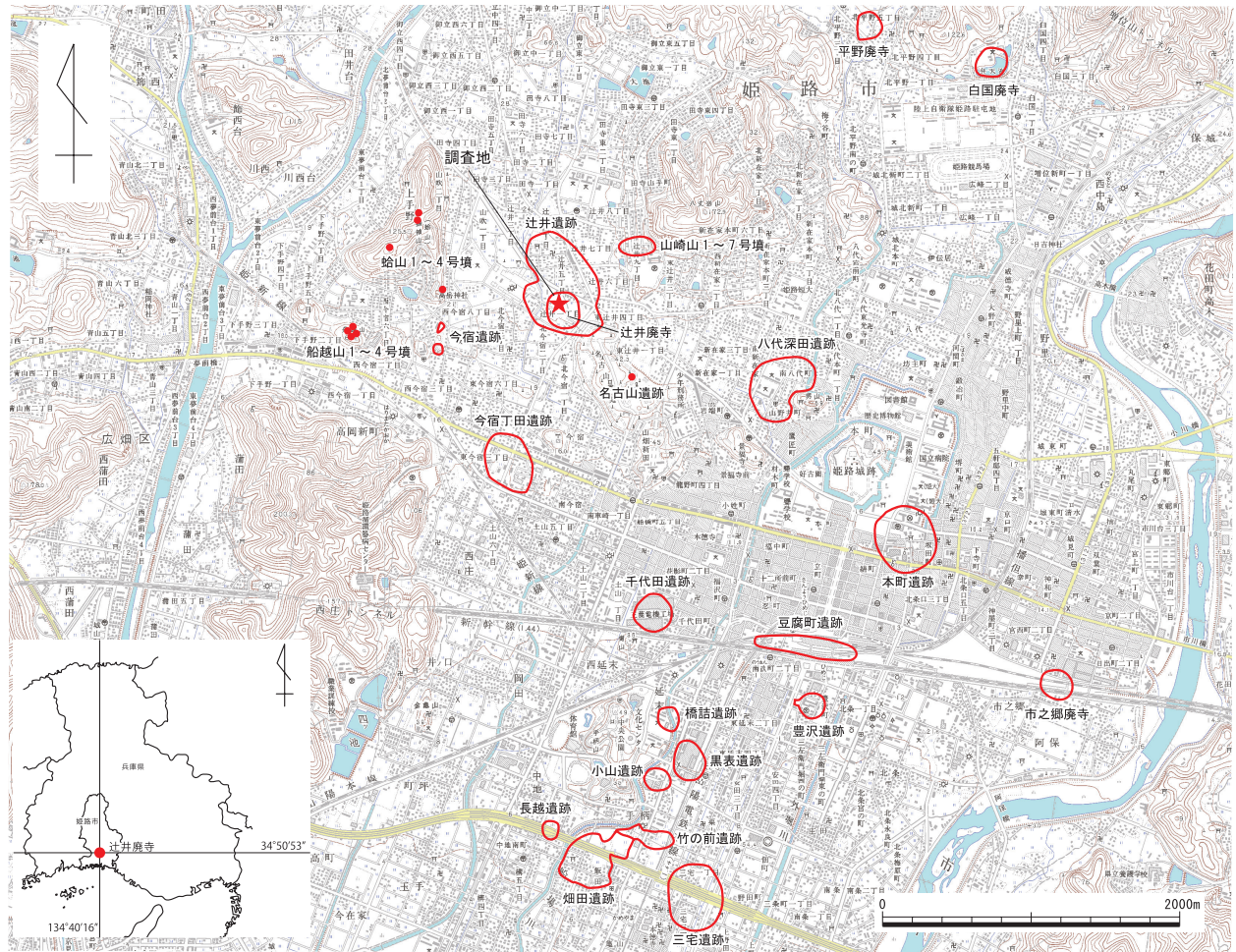
寺院以前の遺構 第20次調査第5トレンチで確認した溝02と一連と考えられるSD13・14・16を検出した（図版13-2）。溝16については概ね接合するものの、溝02が北側で東に折れた先では、SD13・14に分岐するようである。SD13・14については平面での精査および土層断面での土層観察から切り合いは確認できなかった。SD13の瓦溜まりからは高台をもつ須恵器杯の小片とともに、方形斜格子のタタキをもつ平瓦も出土していることから、従来から報告されている7世紀後半の年代観とも齟齬は生じていない。なお、62はSD13検出作業中に出土したことを付記しておく。

第3章 まとめ

弥生時代 今回の調査では、弥生時代中期前葉（SK30）と中葉（SD5・9、SK25）の資料を得ることができた。先行研究（大手前大学史学研究所編2007ほか）にもあるように、当該時期の中播磨以西においては資料が乏しいなかで比較的良好な資料を得ることができたといえよう。

奈良時代 寺院の中心域に近い場所を調査したにも関わらず、寺院に直接関連する遺構は検出できなかった。掘立柱建物については、これまで報告されてきたものとは異なる方位であった。また、寺院に先行する遺構についても既往の調査で検出した遺構と整合が取れない箇所もあり、今後課題を残すことになった。

【引用・参考文献】今里幾次1971『姫路市辻井遺跡-その調査記録-』古代播磨研究会、同1995『播磨古瓦の研究』真陽社、今里幾次・大谷輝彦2010「T07」辻井廃寺」姫路市史編集専門委員会編『姫路市史』第七巻下資料編考古 姫路市、大手前大学史学研究所編2007『弥生土器集成と編年-播磨編-』六一書房、佐原真編1996『祭りのカネ銅鐸』歴史発掘⑧講談社、山崎敏昭2009「1〇（いちまる）型中央土坑と関連遺構のひろがり」『考古学の視点 兵庫発信の考古学』間壁霞子先生喜寿記念論文集刊行会、松本正信・加藤史郎1971『辻井遺跡発掘調査報告書』姫路市教育委員会

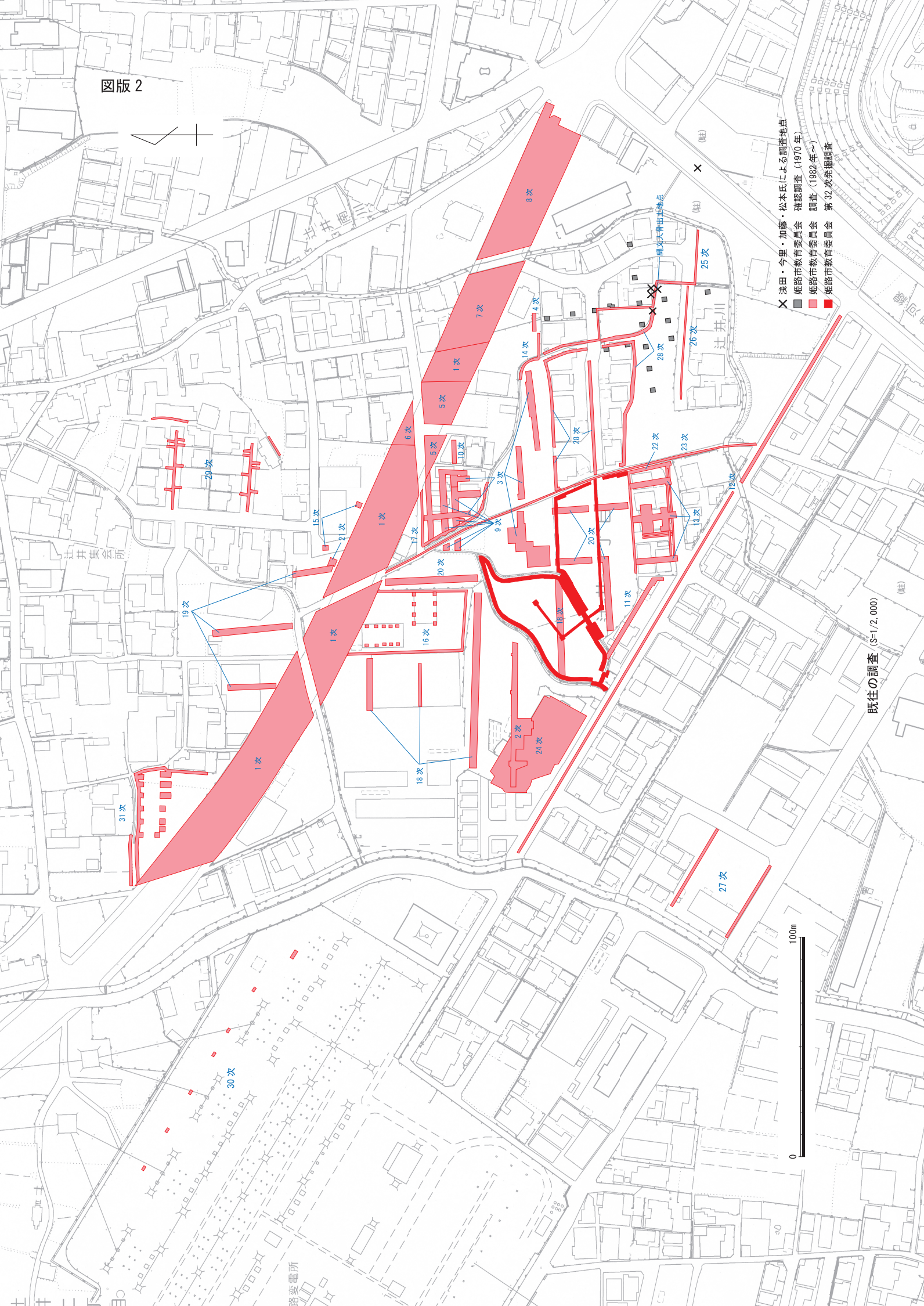
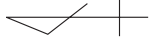


1. 周辺の主な遺跡 (S=1/50,000)



2. 調査地の位置 (S=1/2,000)

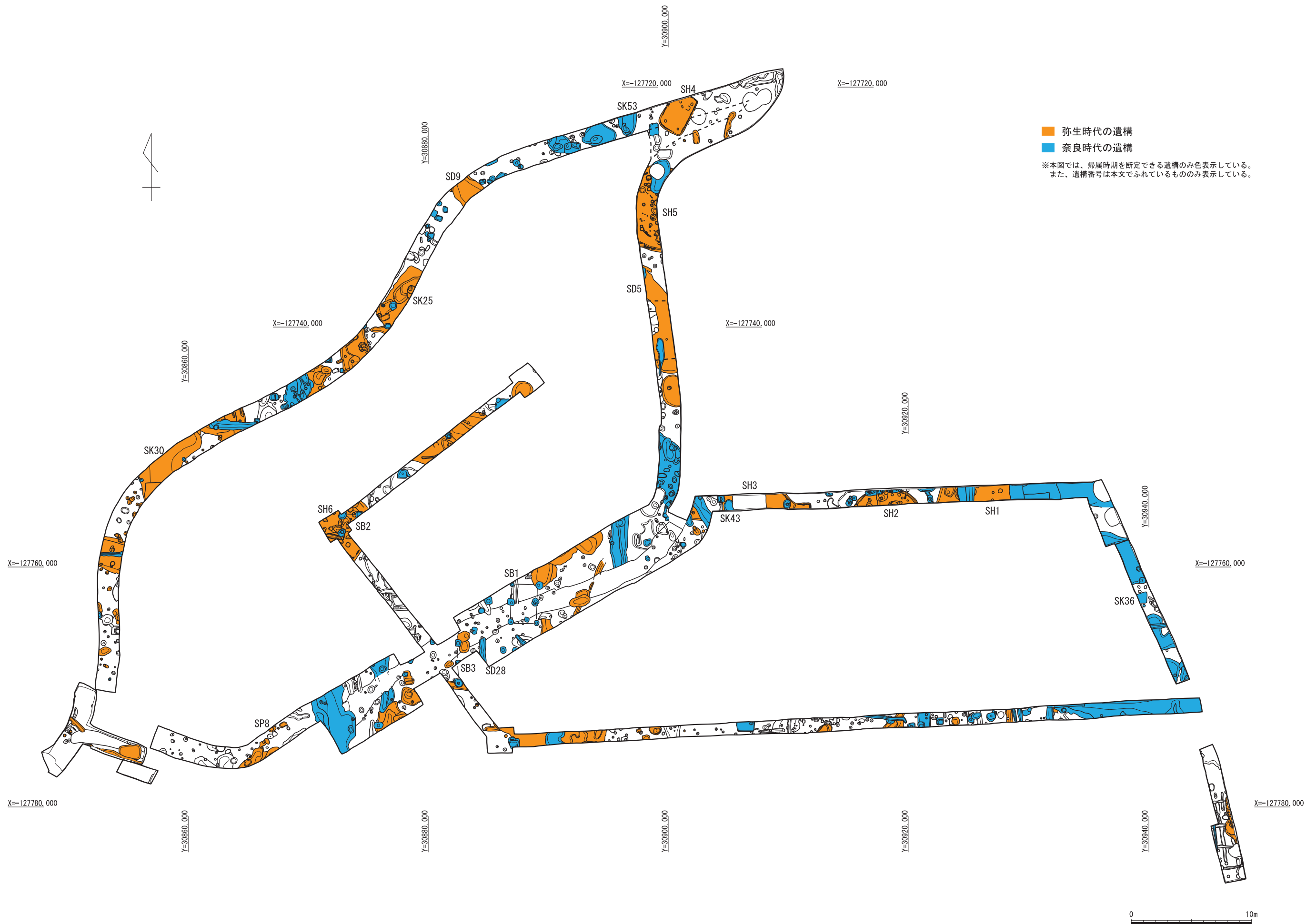
図版 2



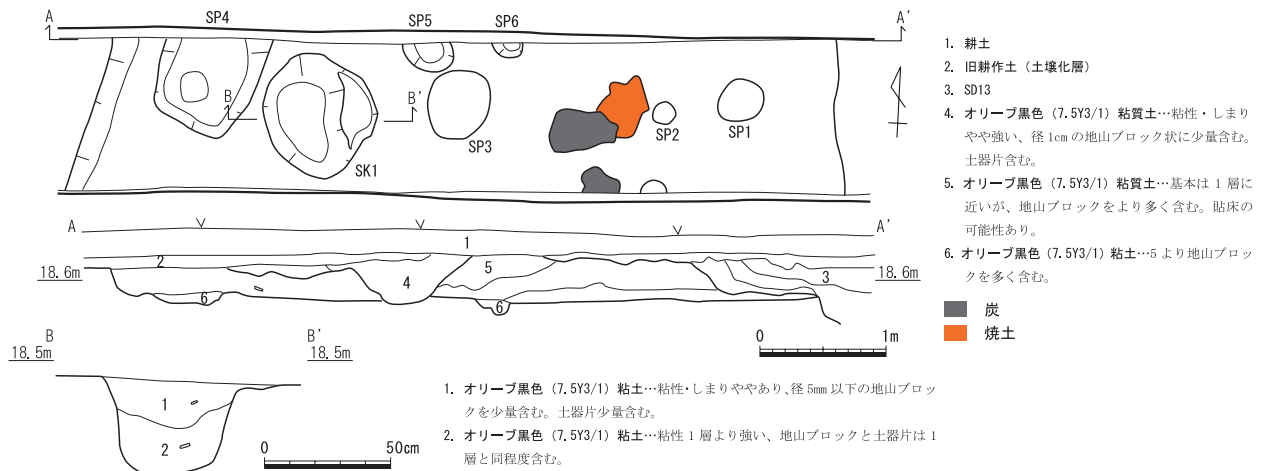
- X 浅田・今里・加藤・松本氏による調査地点
- 姫路市教育委員会 確認調査 (1970年)
- 姫路市教育委員会 調査 (1982年～)
- 姫路市教育委員会 第32次発掘調査

既往の調査 (S-1/2,000)

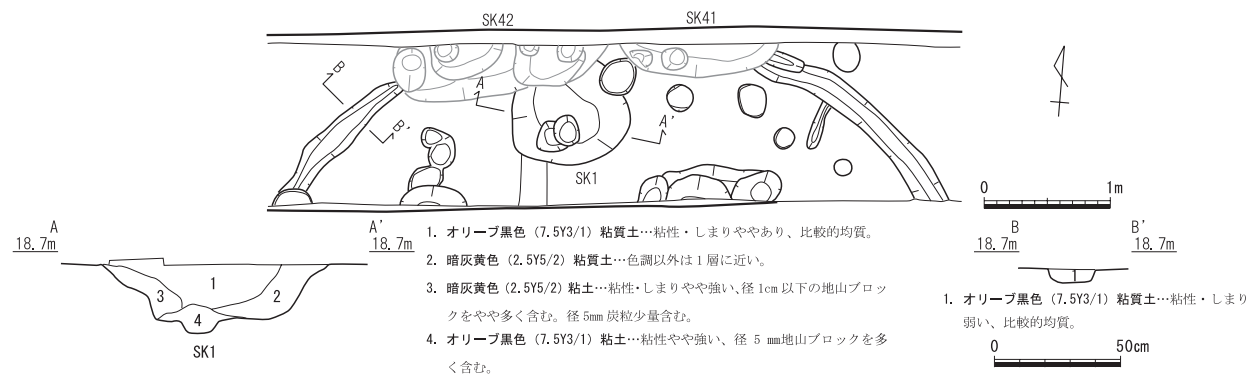




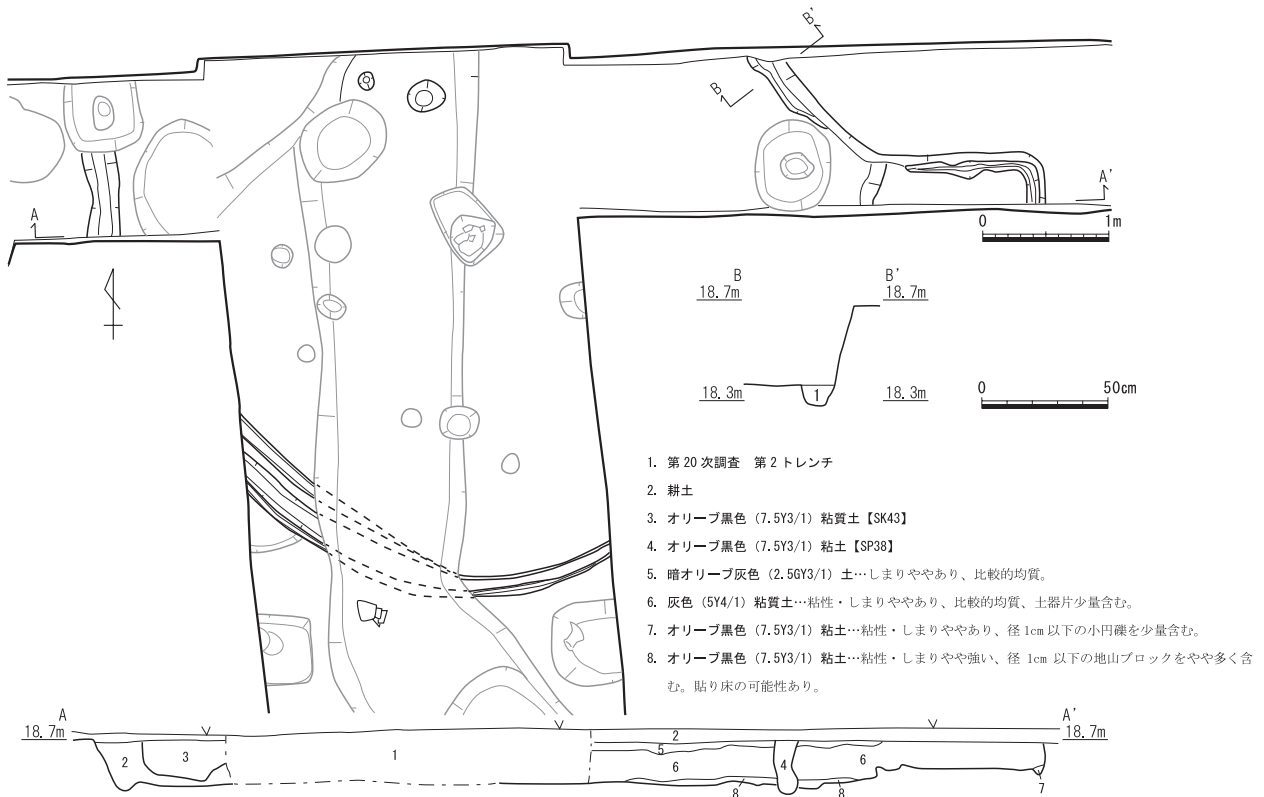
図版 5



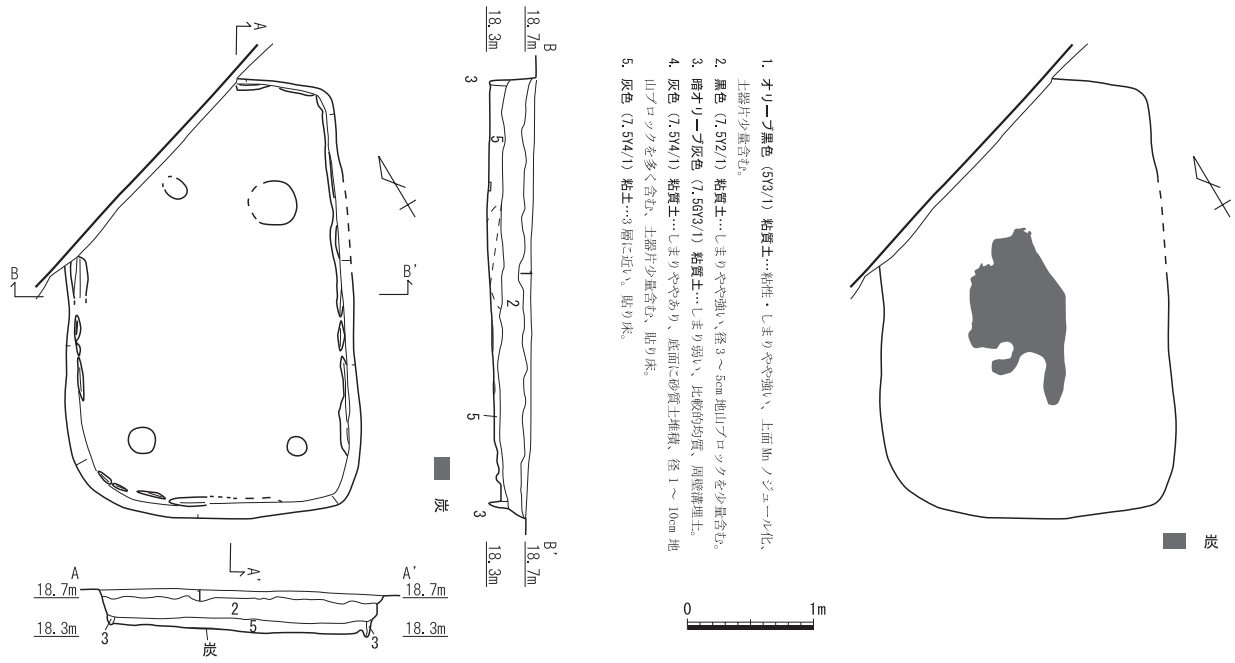
1. SH1 平・断面図 (S=1/60)、SK1 断面図 (1/30)



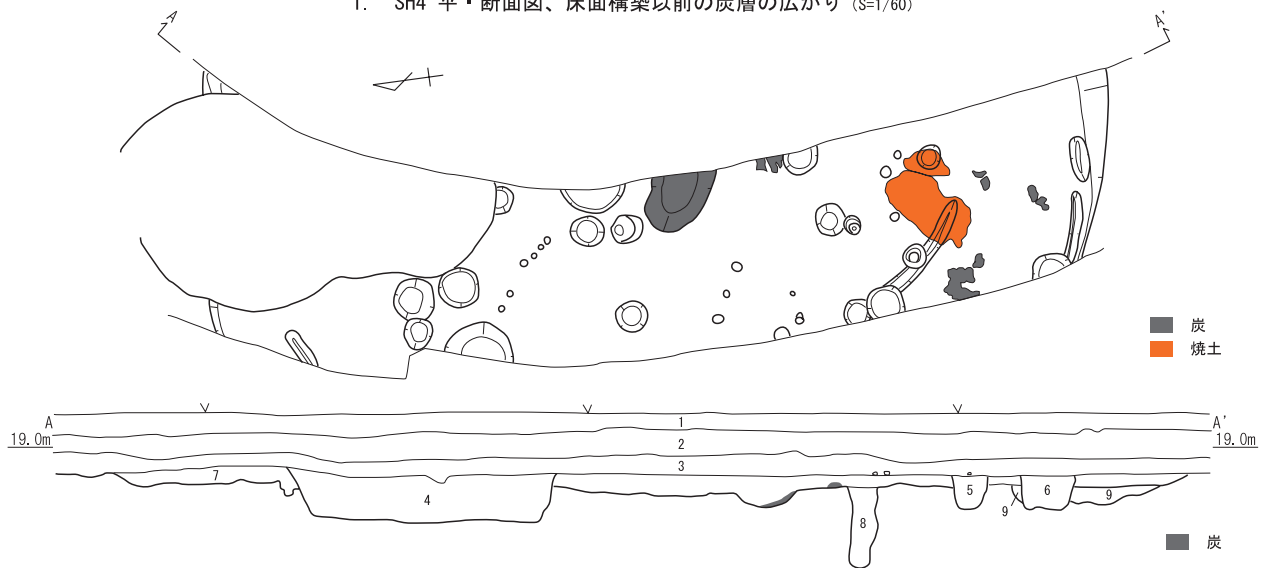
2. SH2 平面図 (S=1/60)、SK1・周壁溝断面図 (S=1/30)



3. SH3 平・断面図 (S=1/60)、周壁溝断面図 (S=1/30)



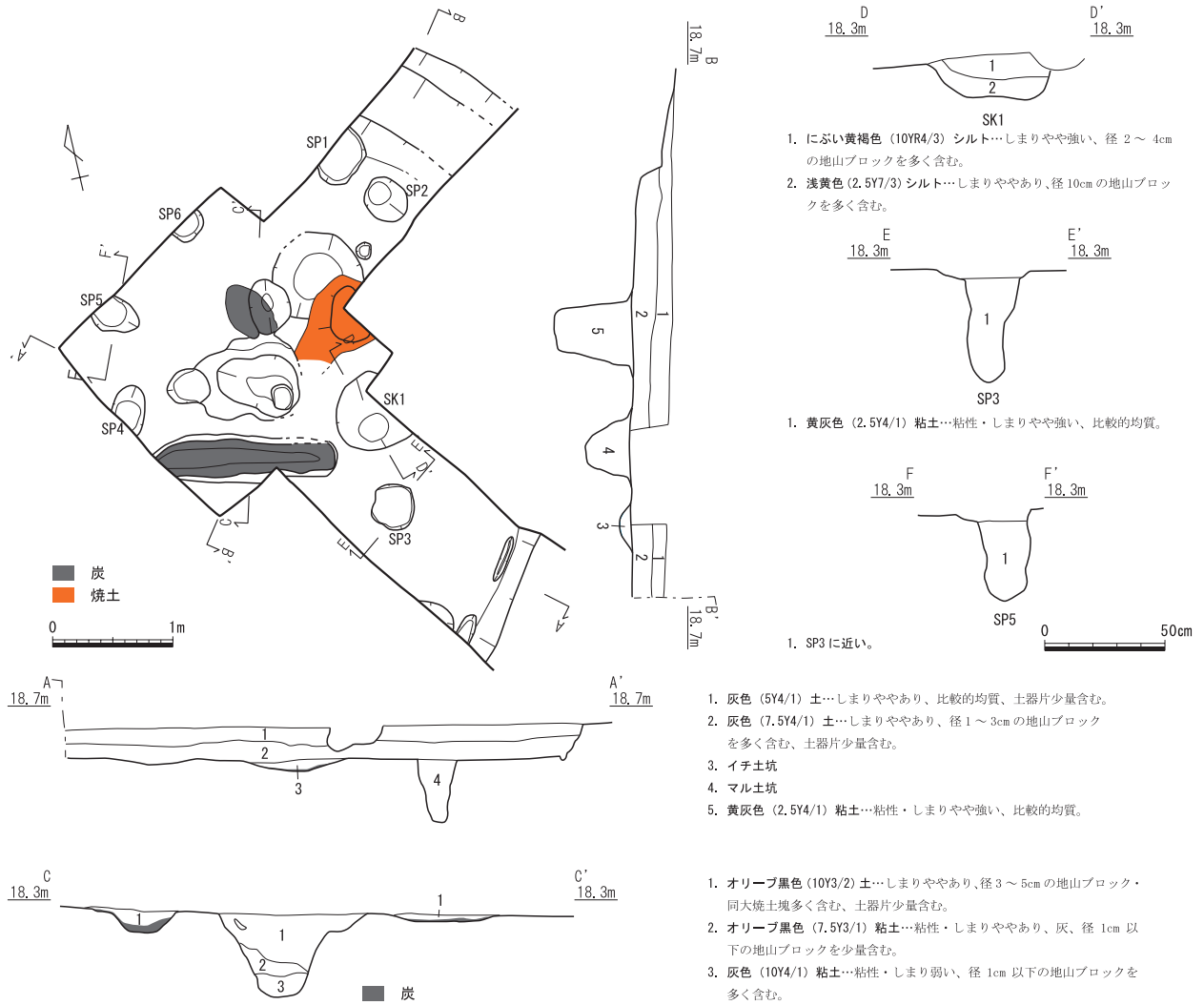
1. SH4 平・断面図、床面構築以前の炭層の広がり (S=1/60)



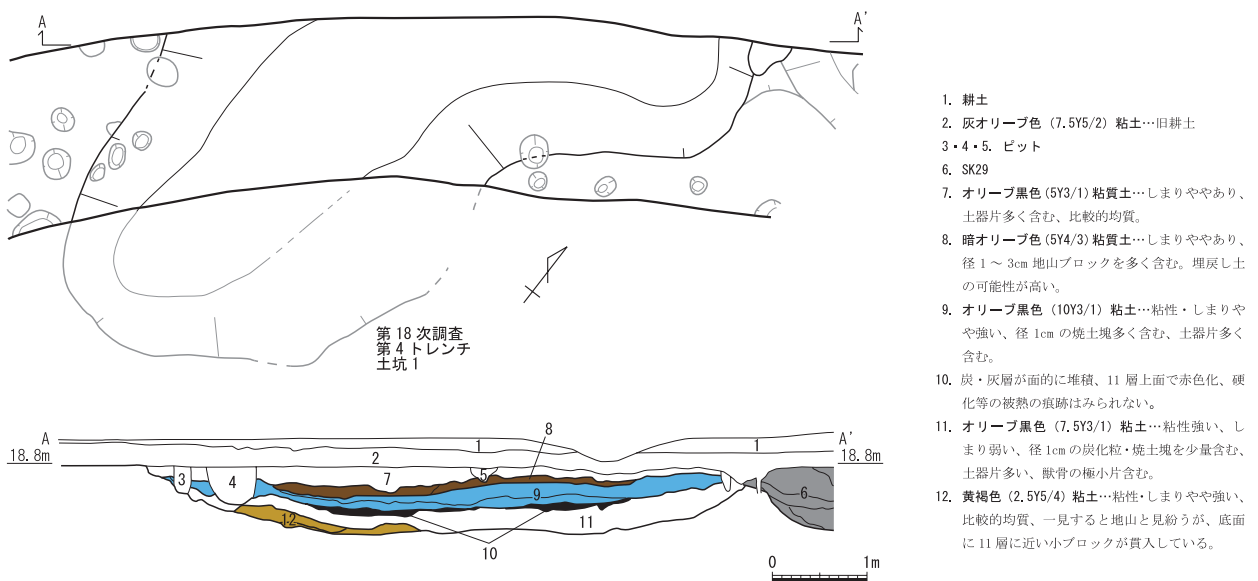
1. 耕土
2. 灰黄色 (5Y7/2) 粘土…旧耕土
3. 暗オリーブ灰色 (2.5GY3/1) 土…しまりややあり、比較的均質。
4. 黄灰色 (2.5Y5/1) 粘土…SK48
5. 褐灰色 (10YR5/1) 粘土…SP104
6. 褐灰色 (10YR5/1) 粘土…SP105
7. オリーブ黒色 (5Y3/1) 粘質土…粘性・しまりややあり、比較的均質、径 1cm 以下の炭化粒を部分的に含む。土器片少量含む。
8. オリーブ黒色 (5Y3/1) 粘土…粘性やや強い、しまりややあり。
9. 暗オリーブ灰色 (2.5GY4/1) シルト…しまりやや強い、径 2cm 以下の地山ブロックや多く含む。床面構築以前の遺構。

2. SH5 平・断面図、下部構造 (S=1/60)

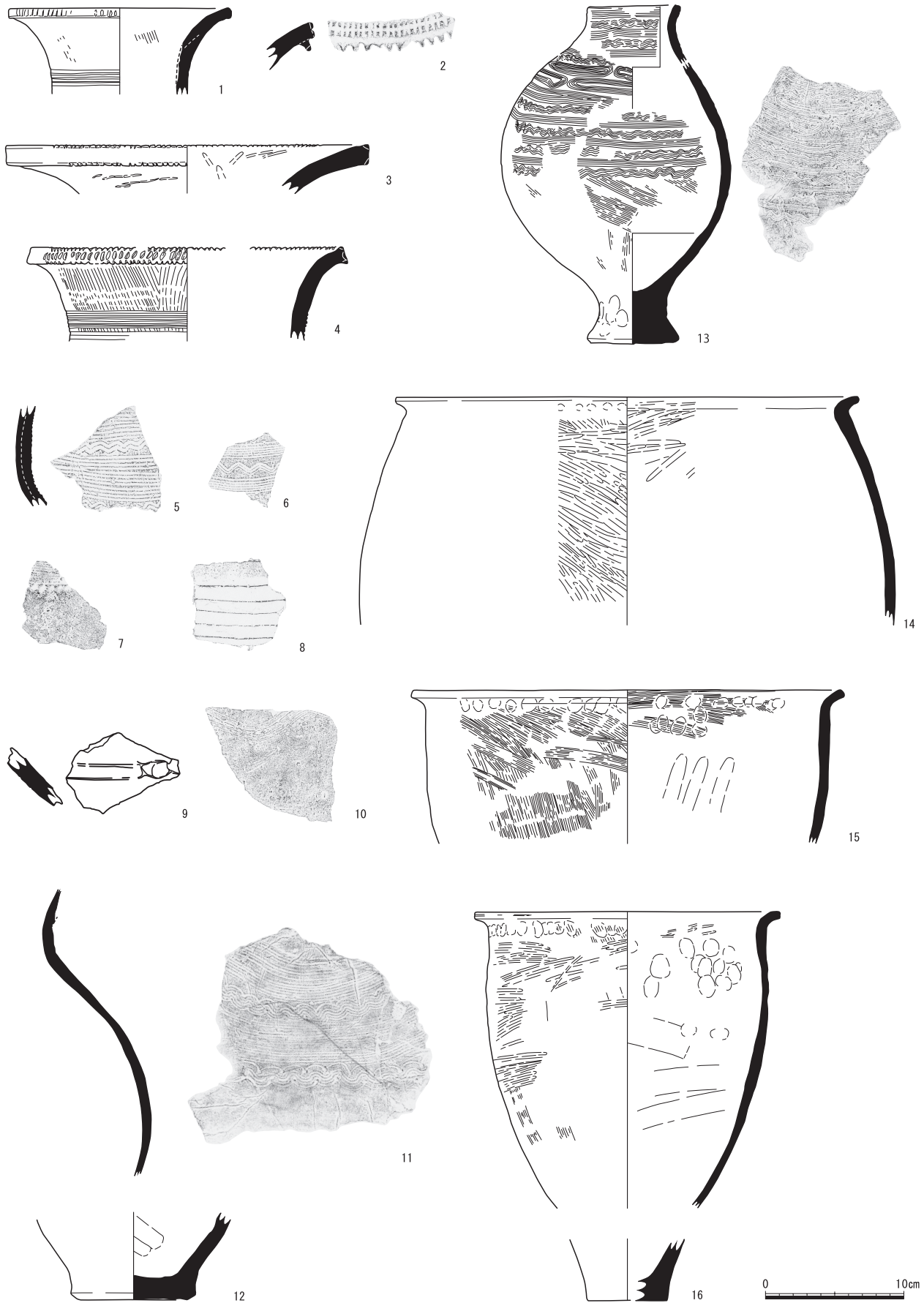
図版 7



1. SH6 平・断面図 (S=1/60)、イチマル土坑・柱穴断面図 (S=1/30)

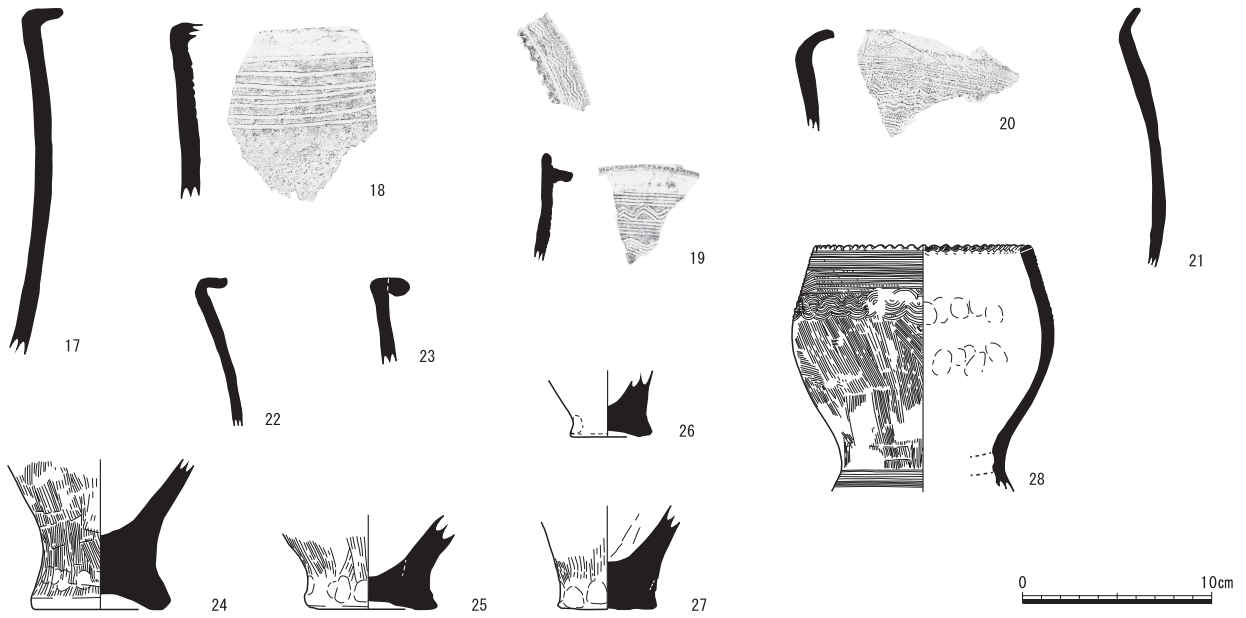


2. SK30 平・断面図 (S=1/80)

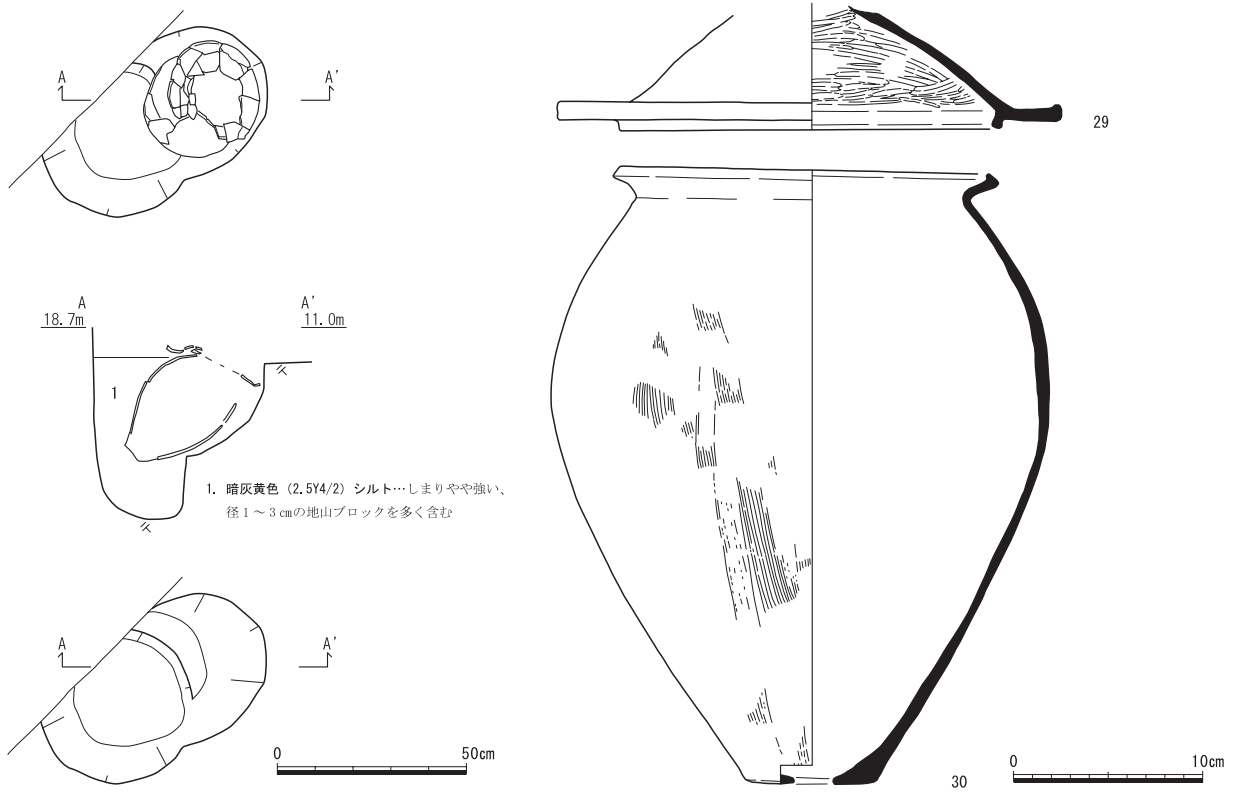


SK30 出土土器 (1) (S=1/4)

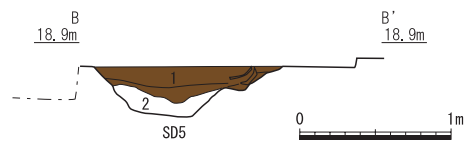
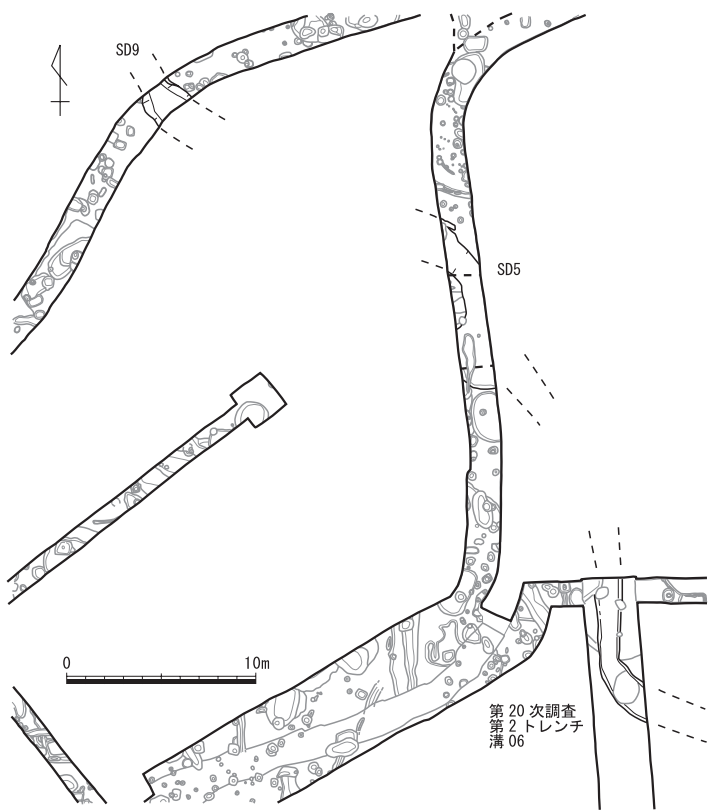
図版 9



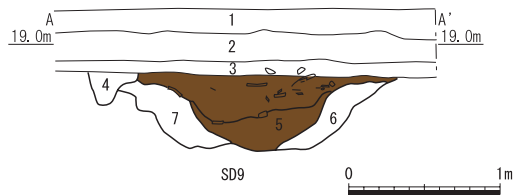
1. SK30 出土土器 (2) (S=1/4)



2. SP8 平・断面図 (S=1/20)、出土土器 (S=1/4)

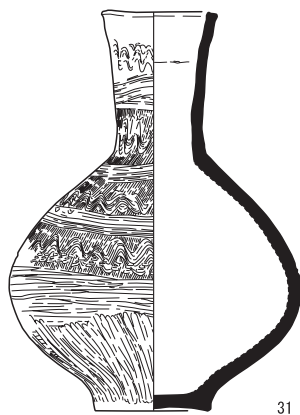


1. オリーブ黒色 (5Y3/1) シルト…しまりやや強い、比較的均質、土器片極めて多い、湿地状堆積、一時的に滞水があったことをうかがわせる。
2. 灰色 (5Y5/1) シルト…しまりやや強い、底面付近で径 3 cm 地山ブロックを多く巻き上げる。土器はほとんど含まないもの、31 が出土している。

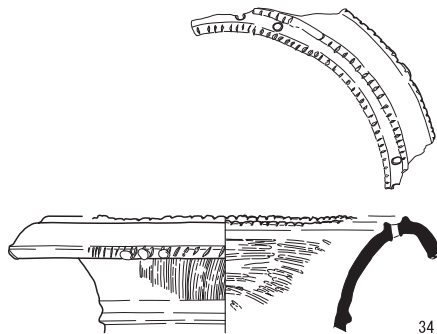


1. 耕土
2. 灰オリーブ色 (7.5Y5/2) 粘土…旧耕土
3. 浅黄色 (5Y7/3) 粘土…土壌化が著しく進行
4. ビット
5. 黒褐色 (10YR3/1) シルト…しまりやや強い、比較的均質、土器片極めて多い、湿地状堆積、均質な堆積をみせる。6・7層以降に滞水があったことをうかがわせる。
6. 灰色 (7.5Y4/1) シルト…しまりやや強い、均質、土器片はほとんど含まない。
7. 暗灰黄色 (2.5Y5/2) シルト…しまりやや強い、均質、土器片はほとんど含まない。

1. SD5・9 平面図 (S=1/400)、断面図 (S=1/50)



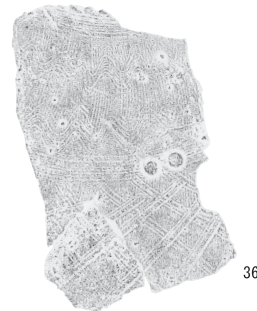
31



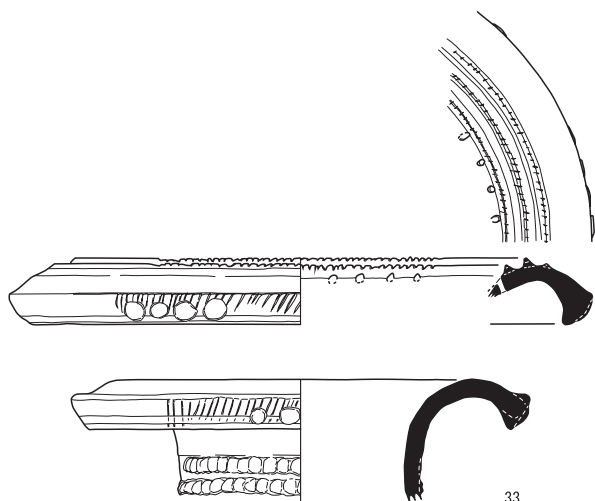
35

34

2. SD5 出土土器 (S=1/4)



36

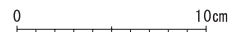


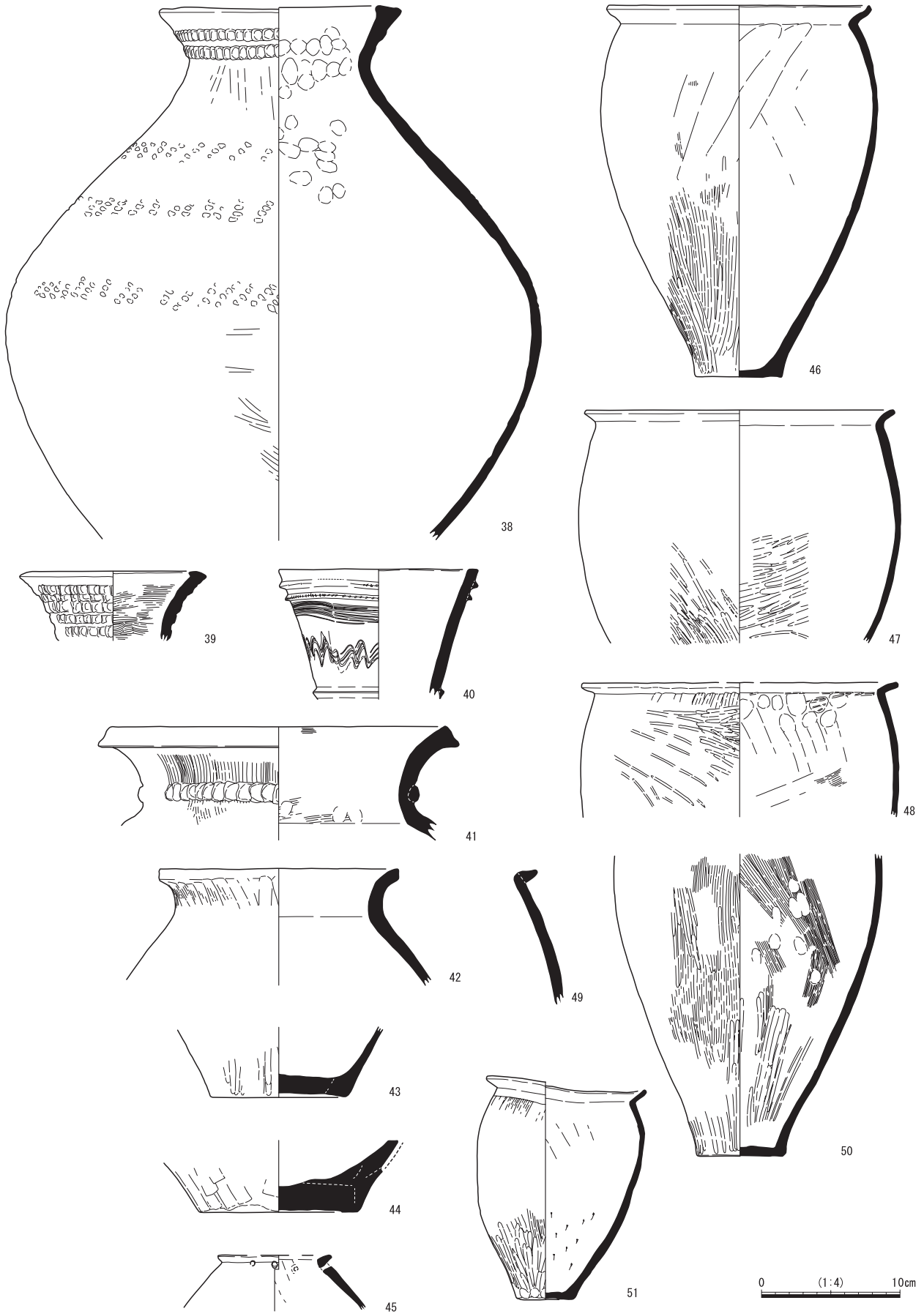
32

33

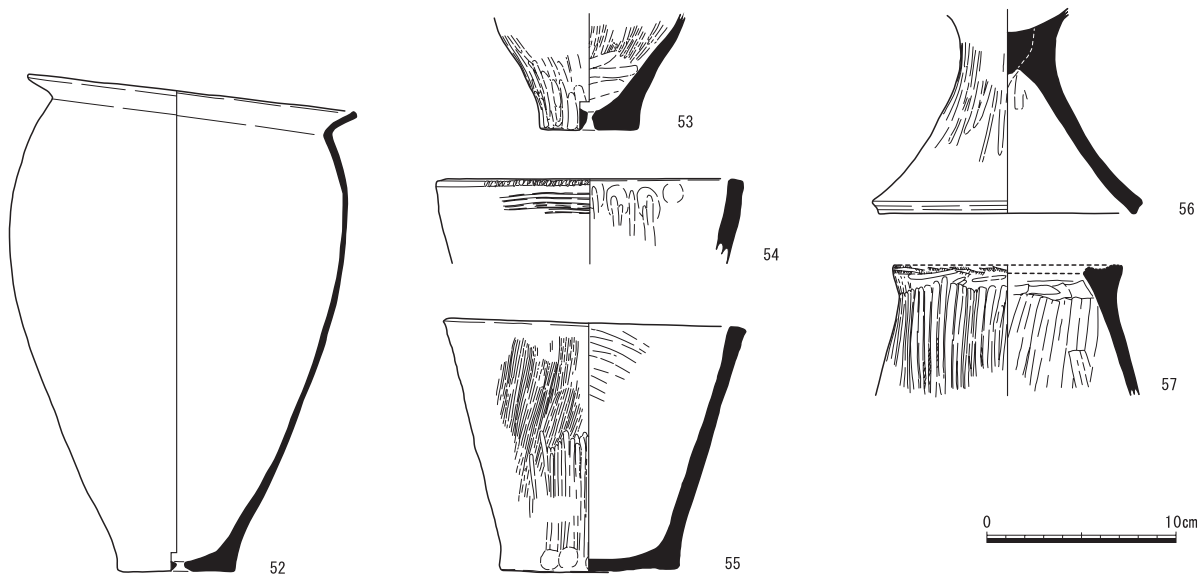
37

3. SD9 出土土器 (1) (S=1/4)

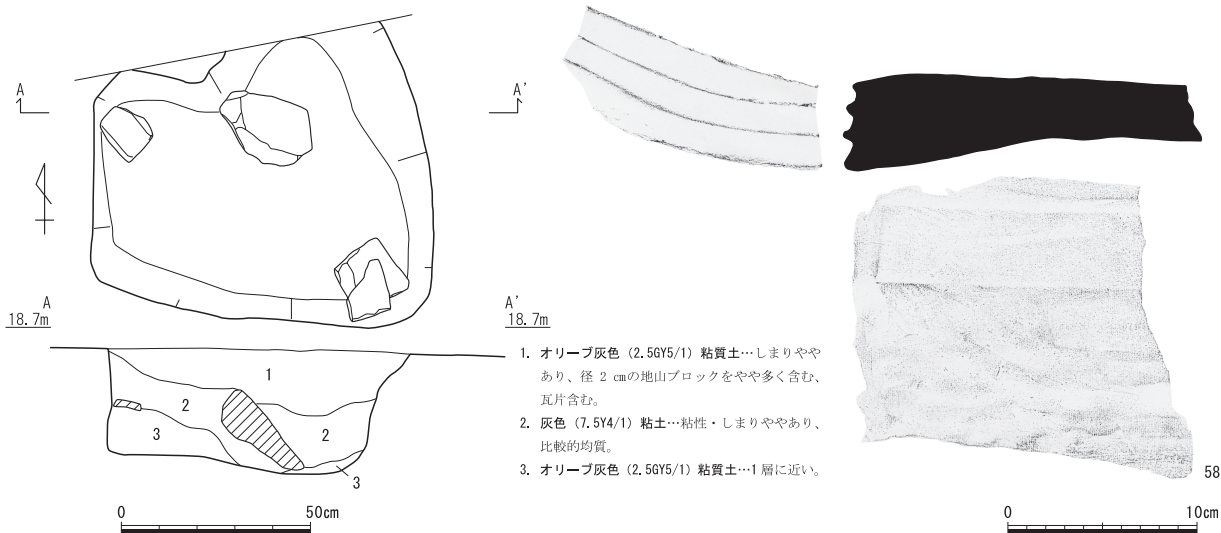




SD9 出土土器 (2) (S=1/4)

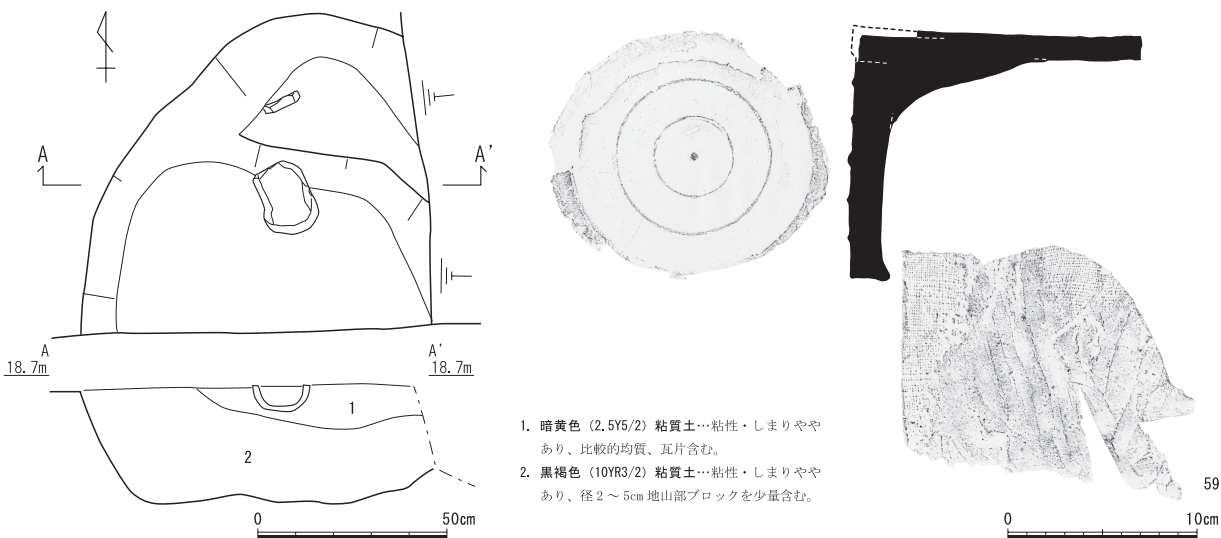


1. SD9 出土土器 (3) (S=1/4)



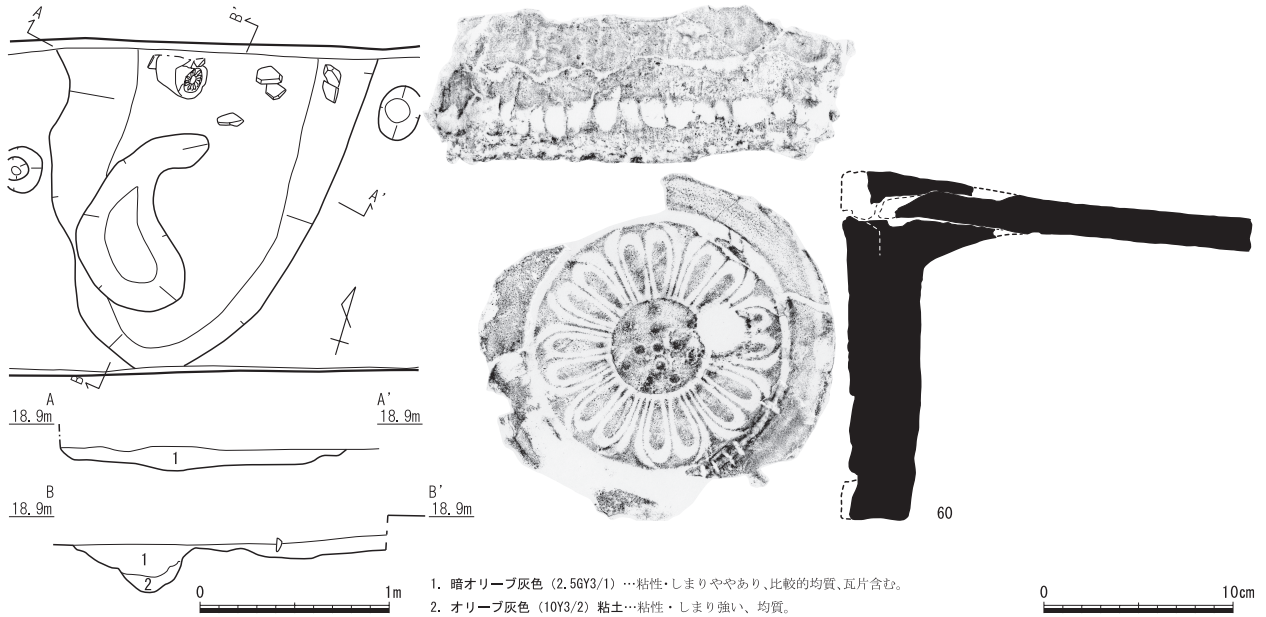
1. オリーブ灰色 (2.5GY5/1) 粘質土…しまりややあり、径 2 cm の地山ブロックをやや多く含む、瓦片含む。
2. 灰色 (7.5Y4/1) 粘土…粘性・しまりややあり、比較的均質。
3. オリーブ灰色 (2.5GY5/1) 粘質土…1 層に近い。

2. SK36 平・断面図 (S=1/20)、出土瓦 (1/4)

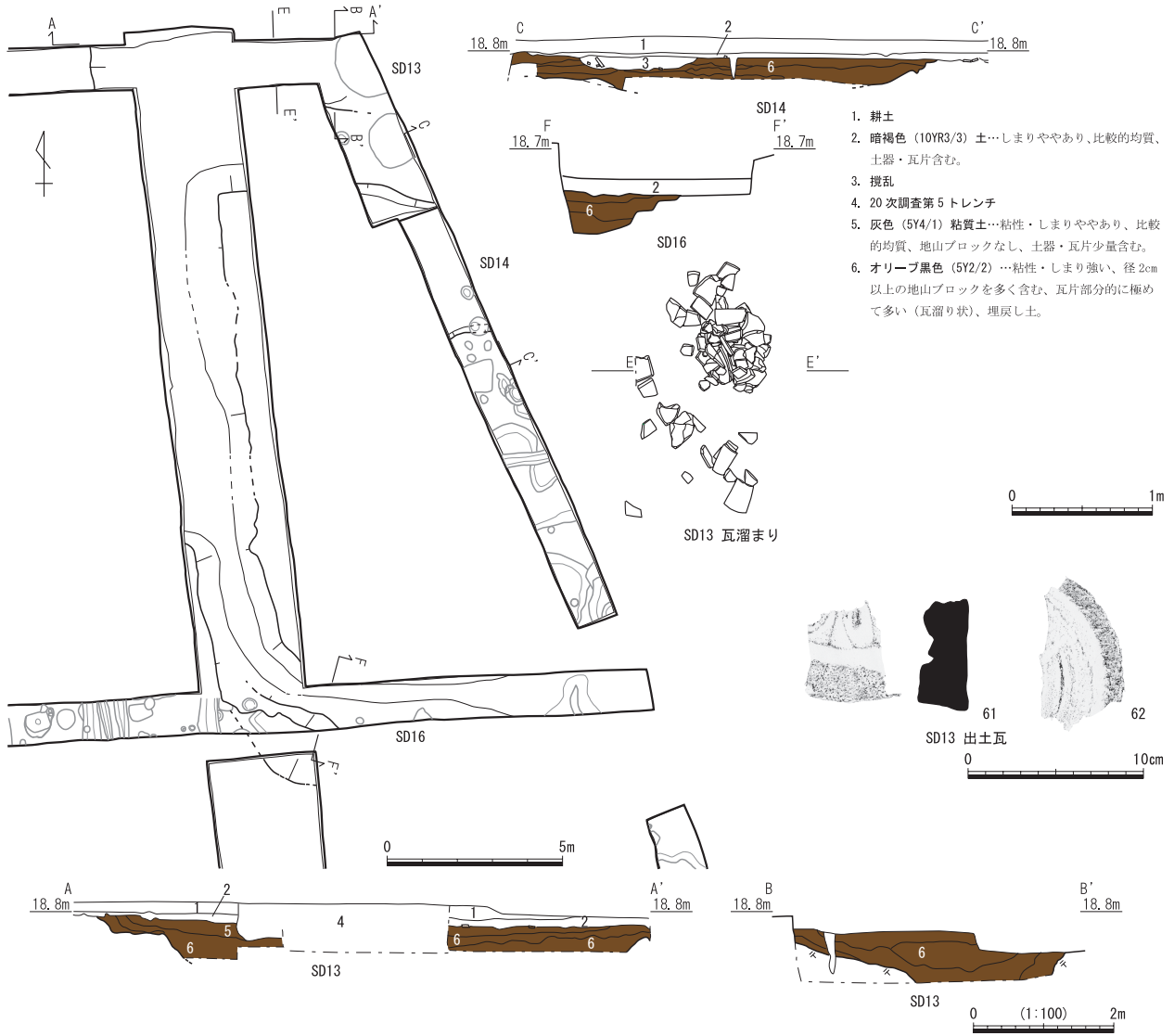


1. 暗黄色 (2.5Y5/2) 粘質土…粘性・しまりややあり、比較的均質、瓦片含む。
2. 黒褐色 (10YR3/2) 粘質土…粘性・しまりややあり、径 2 ~ 5cm 地山部ブロックを少量含む。

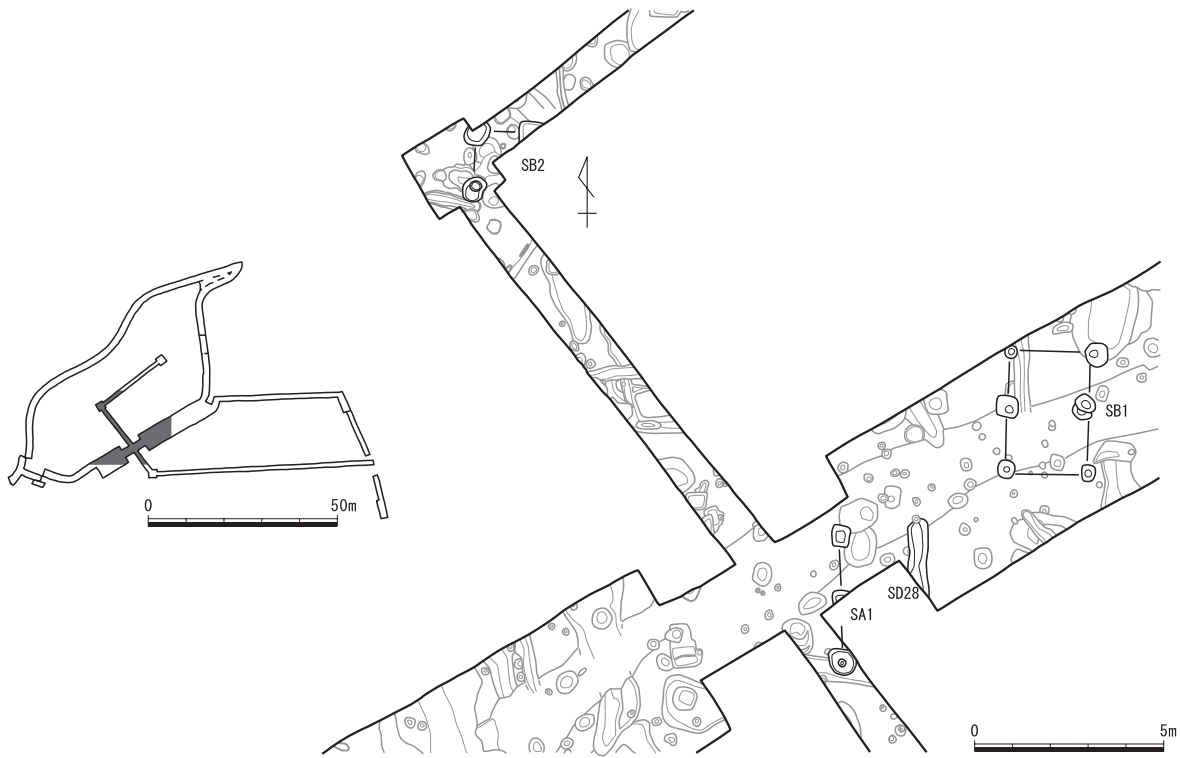
3. SK43 平・断面図 (S=1/20)、出土瓦 (S=1/4)



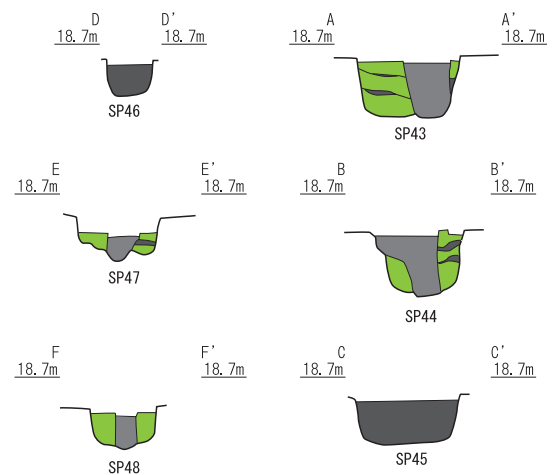
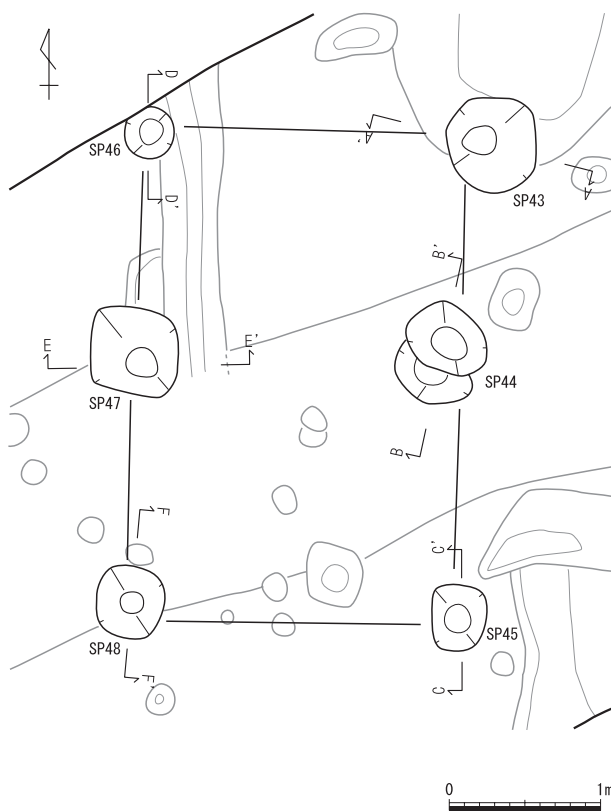
1. SK53 平・断面図 (S=1/40)、出土瓦 (S=1/4)



2. SD13・14・16 平面図 (S=1/200)、断面図 (S=1/100) (S=1/50)、SD13 瓦溜まり平面図 (S=1/50)、SD13 出土瓦 (S=1/4)

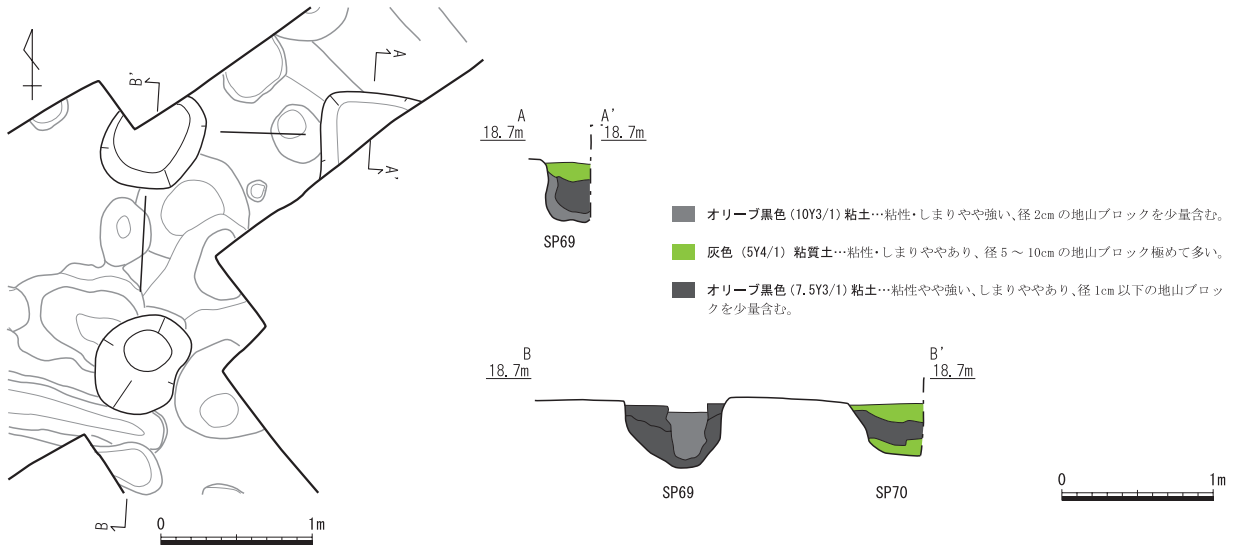


1. SB1・2、SA1、SD28 平面図 (s=1/200)

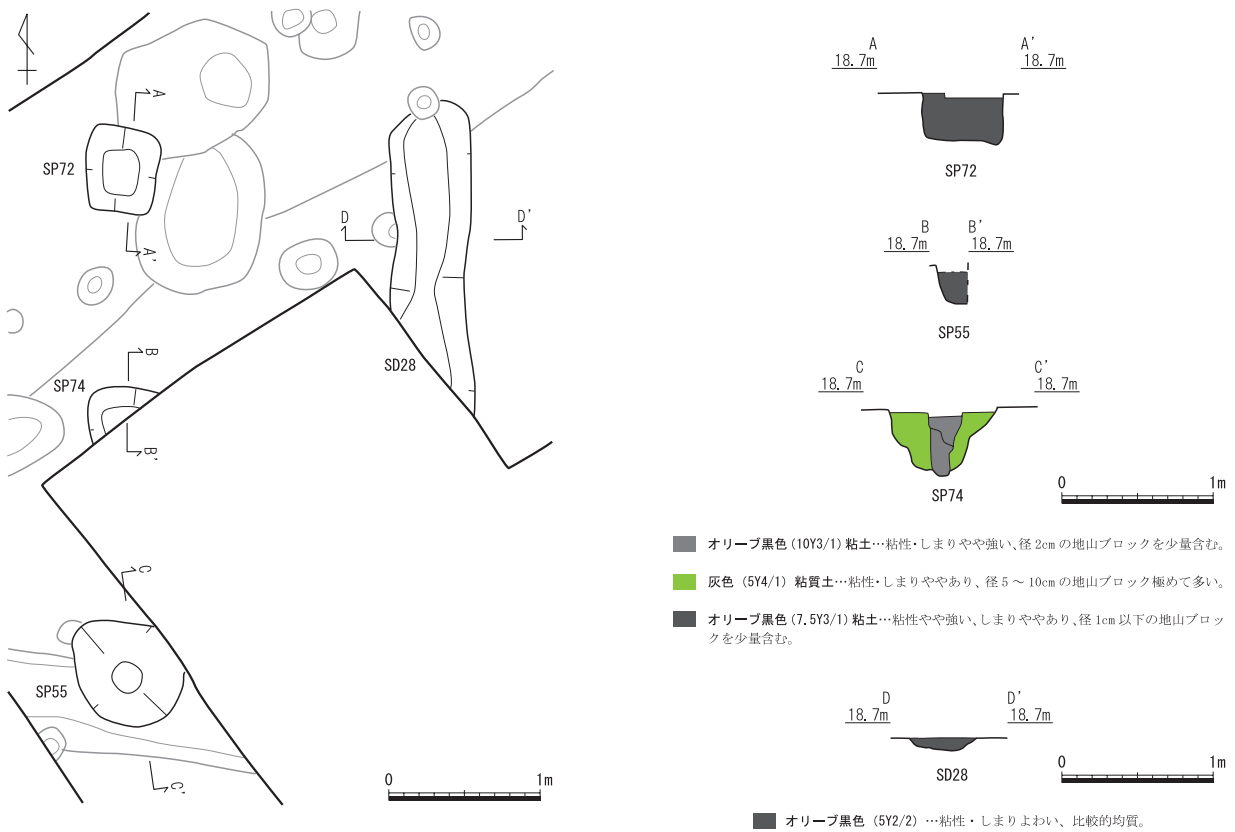


- オリーブ黒色 (10Y3/1) 粘土…粘性・しまりやや強い、径2cmの地山ブロックを少量含む。
- 灰色 (5Y4/1) 粘質土…粘性・しまりややあり、径5～10cmの地山ブロック極めて多い。
- オリーブ黒色 (7.5Y3/1) 粘土…粘性やや強い、しまりややあり、径1cm以下の地山ブロックを少量含む。

2. SB1 平・断面図 (s=1/50)



1. SB2 平・断面図 (S=1/50)



2. SA1・SD28 平・断面図 (S=1/50)

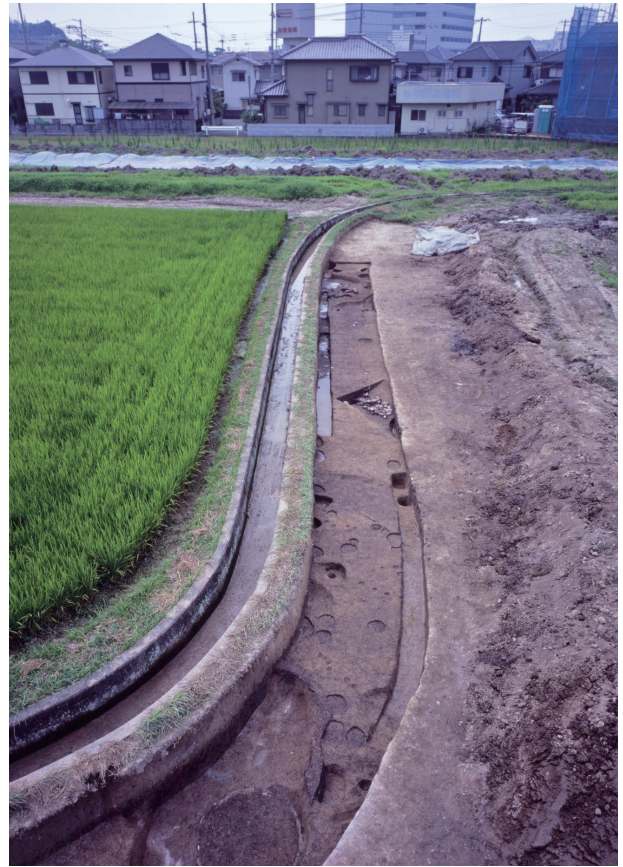


塔心礎から八丈岩山（山崎山古墳群）を望む

写真図版 2



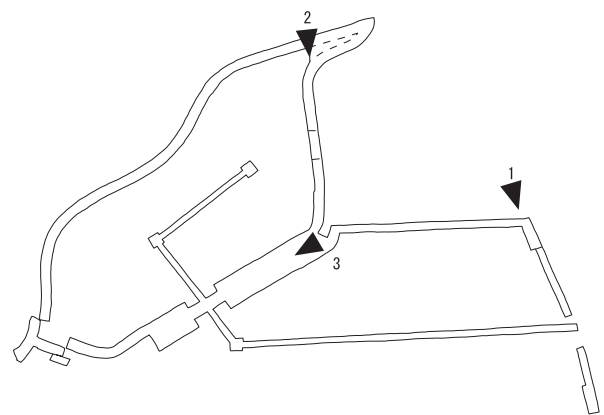
1. 調査区全景（北西から）



2. 調査区全景（北から）



3. 調査区全景（北東から）





1. SH4 (南西から)



4. SK30 (北東から)



2. SH6 (北から)



5. SK30 土層断面



3. SH6 イチマル土坑 (北から)



6. SP8 土器棺出土状況 (南西から)

写真図版 4



1. SD9 土層断面



5. SB2 (北から)



2. SD9 土器出土状況 (南から)



6. SA1・SD28 (西から)



3. SB1 (北東から)



7. SD13 瓦溜まり検出状況 (西から)



4. SP43 土層断面





31



50



52



55



56 外面



56 内面



60 瓦当の接合面



59



60



61



挿図 1

報告書抄録

ふりがな	つじいはいじ							
書名	辻井廃寺							
副書名	第32次発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	姫路市埋蔵文化財センター調査報告							
シリーズ番号	第37集							
編著者名	福井 優							
編集機関	姫路市埋蔵文化財センター							
所在地	〒671-0246 兵庫県姫路市四郷町坂元414番地1 TEL (079) 252-3950							
発行年月日	平成28年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査 面積	調査 原因
		市町村	遺跡番号					
つじいはいじ 辻井廃寺 つじいせき 辻井遺跡	ひょうごけんひめじし 兵庫県姫路市 つじい 辻井一丁目 775外	28201	020163 020162	34° 50′ 53″	134° 40′ 16″	2015. 6. 17 2015. 9. 12 2015. 11. 19 2015. 11. 20	608m ²	宅地 開発
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		遺跡調査番号		
辻井遺跡	集落跡	弥生時代	竪穴建物跡 土坑	弥生土器、サヌカイト製石器		20150109		
辻井廃寺	寺社跡	奈良時代	掘立柱建物跡	瓦、須恵器、土師器				
要約	今回の調査では奈良時代の遺構を数多く確認したが、寺院に直接関連する遺構は検出できなかった。遺構のうち、掘立柱建物跡は2棟あったが、これまでの調査で確認してきた建物とは方位を異にし、詳細な時期や性格についても判然としない。また、出土遺物について、瓦は多く出土したものの、瓦当を有するものは非常に少なかった。それとは対照的に弥生時代の竪穴建物跡・土坑・溝などを多く検出した。これらの遺構からは弥生時代中期前葉や中葉を中心とした時期の土器が大量に出土した。これらの時期の土器は、姫路市内をはじめ、播磨では出土例が少ない。辻井遺跡はもとより、播磨の弥生時代を考えるうえで非常に貴重な資料を得ることができた。							

姫路市埋蔵文化財センター調査報告第37集

辻井廃寺－第32次発掘調査報告書－

平成28年（2016年）3月31日発行

編集 姫路市埋蔵文化財センター

〒671-0246 兵庫県姫路市四郷町坂元414番地1 TEL (079) 252-3950

発行 姫路市教育委員会

〒670-8501 兵庫県姫路市安田四丁目1番地

印刷・製本 小野高速印刷株式会社

〒670-0933 兵庫県姫路市平野町62番地